

569-142



1200501517380

569

142

庫文造改
篇三十第 部二第

集部七諧俳
校月廬原菘

版出社造改



199



改造文庫

第二部 第三十篇

俳諧七部集

萩原蘿月校



解題

俳諧七部集は普通「冬の日」、「春の日」、「曠野」、「瓢」、「猿蓑」、「炭俵」、「續猿蓑」を以て代表させてゐる。併し芭蕉生涯の變風を七部の書を以て代表させる議論に就ては、既に去來、支考、許六、風國等の間に起つた事である。許六は「字陀法師」に、曠野、瓢、猿蓑、炭俵、續猿蓑をあげて、芭蕉の變風を示し、「歷代滑稽傳」に於て、桃青二十歌仙、初懷紙、冬の日、春の日、曠野、瓢、猿蓑、炭俵、深川集、續猿蓑の十一部を代表的撰集に選んでゐる。去來は「贈晋氏其角書」の中に、瓢、猿蓑、炭俵、續猿蓑をあげ、「答許子問難辯」の中に、次韻、虛栗、冬の日、猿蓑、炭俵の五部を以て、芭蕉變風を代表さすべき撰集と考へてゐた。風國も「泊船集」の序詞に、冬の日、瓢、猿蓑、炭俵、續猿蓑をあげ芭蕉俳諧の變風を論じてゐる。支考に至りては七部編者と疑はれるだけ、其の論も濃厚であつた。即ち彼は「阿誰話」に於て、冬の日、春の日、曠野、猿蓑、炭俵、續猿蓑をあげて、前後に七度の變はありながらと論じ、「發願文」に於て、冬の日春の日、曠野、猿蓑、炭俵、續猿蓑をあげ、すべて五度の變化を見て、俳諧の元祖と仰がれと云ひ、「俳諧古今抄」に於て、春の日―冬の日、瓢―猿蓑、炭俵、俳諧はかく三變と知るべしと簡拔説を唱へてゐる。雪中庵吏登も亦師嵐雪の三變論を支持してゐる。かくの如く芭蕉直弟の間に於て既に芭蕉の撰集論はあつたので、其の後天明に於て小夜庵五明の眞、行、草、十一部集論がやゝ時流に卓然としてゐる外、世は皆滔々として支考、風國等の三變論、七變論を以て覆はれて來たのである。

七部集の内容に就ても種々説があつたのである。雪中庵蓼太は「棚さがし」に於て、曠野は芭蕉の補助に成つたものではなからうと論じ、小夜庵五明は春の日、曠野は芭蕉の書でないを斷じ、蘭更は「續七部」の序に、春の日を疑ひ、素蓮は「芭蕉庵春秋」に、強硬に春の日を斥けてゐる。殊に疑惑の眼を集められてゐるものは續猿蓑であつた。續猿蓑が偽書であるといふ説は越人の「不猫蛇」に論ぜられて以來、七部研究者の之を抹殺する者頗る多いのである。麥水は續猿蓑を除いて虚栗を入れ、加興は續猿蓑を除いて深川集を入れ、何丸も續猿蓑を除いて「大鏡」に初懷紙を註し、甚しきは春の日、續猿蓑を除き、雪丸げ、初懷紙を入れ、深川集の代りに卯辰集を加へたりしたのもあつたのである。要するに各宗匠の見地と趣味によつて、種々なる内容を作る事となつたのであるが、七部編輯の目的が芭蕉の變風を簡明に而かも時代的に知らせようとしたのならば、變風の代表にもならない集を入れたとて無意味である。私は初懷紙、虚栗、卯辰集、雪丸げ、深川集をぬきさしする事には賛成出来ない。俳諧七部集はやはり從來の七部の書で十分だと思ふのである。

一體七部の書を俳諧七部集と題して刊行した事は芭蕉歿後の事であつた。續猿蓑は元祿十一年刊)を除き、他の六部の書は、芭蕉生前單行本として出たものではあるが、七部にまとめて刊行したのは芭蕉の知らぬ事であつた。それも何時まとめて出版したものか、何人が編じたものか明かでないのである。成美は「大鏡」の序に、世に俳諧の七書と云ものは、芭蕉のかく定め置けるものにもあらざるを、後の人の心に諸集の中を拔出しものなれど……と云ひ、月溪も「蕪村七部集」の序に、はせを翁およびキ角嵐雪があらはせし句録七部を俳諧七部集といふことは、いつの頃よりは

ひ出たるやらんしらず、……とあつて詳かではないのである。併し曲齋の説によると、享保、元文の間の出版であらうとあるが、或はさうかも知れない。編者も「芭蕉翁新七部集」の其成の序に、支考の仕業なる由とあるが、これも確たる根據はないやうである。たゞ支考は芭蕉の偽書を作り、名利の念に強い男である所から、七部編輯も或は支考の業ではなからうかと想像される程度に過ぎなからう。私は版元の井筒屋の手によつて、營利を目的として出されたものではあるまいかと考へる。併しそれはともかくもとして、實に此の七部集の勢力、尊重といふものは驚く可き程であつたのである。享和三年の「續七部集」の蘭更の序に、正風に志す輩机上に載せずといふ事なところではなく、天保以降になると、梅室老人の如きは、七部集さへ讀まざる人を相手に老人大人氣なしと閉口されたり、幹雄の、七部集は俳諧第一の尊き文なれば……と、いよく七部集を斯道の聖典とまで擔ぎ上げてしまつたのである。從て其の註書も頗る多かつたのである。まづ主なるものをいふと、蓼太の「七部搜」、「俳諧棚さがし」、杜勤の「猿蓑爪しるし」、三鷺の「七部抄」、杜哉の「俳諧古集の辯」、蘭更の「冬の日解」、素綾の「七部小槌」、升六の「冬の日註解」、曰人の「炭俵註」、宜麥の「續繪歌仙」、何丸の「七部集大鏡」、公石の「續猿蓑註解」、曰人の「七部礫尊」、成美の「七部集纂攷」「標註七部集」、曉臺、士朗の「秘註俳諧七部集」、「七部集曉臺即註」、註者末詳の「元祿調引證」、「七部集翠兄聞書」、魚潜の「冬の日附合考」、天堂一叟の「俳諧七部集十寸鏡」、何丸の「七部小鏡」、寄三の「七部集連句早見」、錦江の「俳諧七部通旨」、曲齋の「七部婆心録」、穉柯の「猿蓑逆志抄」、西馬の「標註七部集」、青藍の「俳諧七部集大全」、保考の「七部集打聽」等が先づ必讀の書かと思ふのであ

る。次に七部集の翻刻本も行はれたのである。それには安永三年の「小本七部集」、寛政七年の「俳諧七部集再刻本」、精衛道人の「異本七部集」、花鳥庵羅齋の「校正七部集」、龍守・仙鳧の「校正七部集」五律の「正改新刻七部集」等があるのである。但し「小本七部集」には偽版が二三種あるやうで、寫誤多く、携帶に便なものゝ、研究の資にはとても役立たないのである。元祿の單行本は、七部ですべて十二冊あるのであるが、寛政の再刻本は七冊にまとめてある。これも寫誤があつて困るのである。天保以後になると原本も散逸し、再刻本の古びたものを原本と誤認される恐がある所から、校正本が多く出るやうになつたのだらうが、その校本なるものも依然として杜撰で、校正の名に恥ぢはせぬかと思はれる位である。享和以降、芭蕉の七部集に準じて、蕉門の有名な撰集で、彼の七部に洩れたものを出版するやうになつた。即ち「俳諧七部拾遺」、「續七部集」、「蕉門七書」、「芭蕉七書」、「俳諧七部餘録」、「新撰俳諧七部集」等が便利と古書保存を兼ねて出たのであるが、寫誤、脱漏多く、弱らされるのである。なほ又天明以降各宗匠の七部集も、此の影響として續々出版を見るやうになつたのである。即ち「其角七部集」、「樗良七部集」、「士朗七部集」、「西國七部集」、「蕪村七部集」、「流行七部集」、「續士朗七部集」、「士朗五七集」、「月居七部集」、「枯魚七部集」、「曉臺七部集」、「道彦七部集」、「乙二七部集」、「護物七部集」、「更科七部集」、「俳諧今七部集」、「禾葉七部集」、「雪門七部集」、「同拾遺」、「俳諧四部栗」等があつたのである。此の外曲齋の「支考七部集」、「獅子百韻七部集」、「涼菟七部集」などは名のみだけで、實際は出なかつたやうである。

以上で私は七部集の大體論を終つたので、次に各論に移り、最初は「冬の日」の短さに筆を走ら

せようと考へる。

冬の日

芭蕉は貞享元年冬名護屋に入り、野水、荷兮、重五、杜國、正平等と寄合ひ、歌仙五卷、追加表六章を残した。これを「冬の日」又は「尾張五歌仙」と云つて、貞享元甲子歳、京寺町二條上ル町井筒屋庄兵衛兩版であつた。撰者は「花見車」によると、荷兮である。井筒屋、橋治連名の「俳諧書籍目録」には蕉翁撰とあるが誤りであらう。内容は連句のみで、發句は入つてゐない。即ち芭蕉野水、荷兮、重五、杜國、正平の六吟歌仙一卷、野水、杜國、芭蕉、荷兮、重五、正平の六吟歌仙一卷、杜國、重五、野水、芭蕉、荷兮、正平の六吟歌仙一卷、重五、荷兮、杜國、野水、芭蕉、羽笠の六吟歌仙一卷、荷兮、芭蕉、重五、杜國、羽笠、野水の六吟歌仙一卷、追加として羽笠、荷兮重五、杜國、芭蕉、野水の面六章より成つてゐる。

芭蕉は寛文に貞徳風、延寶に談林、天和に幽玄調、貞享に冬の日と變つて來たのである。許六の自讃論上に、愚老(芭蕉)が俳諧は、五歌仙に至らざる人、一生涯成就せず、大事なり、覺悟せよといへり、とある言に徴しても、如何に芭蕉の自信ある集であつたかゞ分るであらう。従つて芭蕉の直弟、其角、風國、去來、支考等の間に、既に此の集の一時代否正風の先馳たるべき代表撰集として議論があつた位である。なほ注意すべきは此の集の俳風が安永、天明の中興俳人に非常な感化を與へた事である。それは尾張の曉臺一派の鼓吹と尊重であつた。即ち曉臺は尾張五歌仙に次で「熱田三歌仙」を撰び、熱田の巻を五歌仙と共に學ばしめたのであつた。又彼が開版の「桃青二十

歌仙一序にも、桃青廿歌仙は畫龍である、畫龍があつて眞龍が出るのである、冬の日五歌仙は即ち眞龍であると論じて、貞享元二の調を高唱してゐる。「冬の日」五歌仙中、最初の巻が一番勝れてゐるかと思ふ。例へば

い ま ぞ 恨 の 矢 を は な つ 聲
ぬ す 人 の 記 念 の 松 の 吹 を れ て 芭 蕉 兮
し ば し 宗 祇 の 名 を 付 し 水 杜 國
笠 ぬ ぎ て 無 理 に も ぬ る 北 時 雨 荷 兮
冬 が れ わ け て ひ と り 唐 萱 野 兮
し ら く と 碎 け し は 人 の 骨 か 何 杜 國
變 化 も あり、 跌宕 雄 渾 の 調、 朗々 誦 すべき である。 初 雪 の 巻、

床 ふ け て 語 れ ば い と こ な る 男 荷 兮
縁 さ ま た げ の 恨 み の こ り し は せ を
口 を し と 瘤 ^{フスベ} を ち ぎ る ち か ら な き 野 水
明 日 は か た き に く び 送 り せ ん 重 五

情緒的内容の横溢せる點、けだし冬の日調の白眉である。尤も次々の巻へ來ると、雪の狂吳の國の笠、樽を棺に吞ほす、芥子のひとへに名をこぼす禪、炭賣の黒からめ、ひとの粧を鏡磨寒、馬骨の霜に咲かへり、秋湖かすかに琴かへす、烹る事をゆるしてはぜを放つなどと云つて、全く虚栗以前

の舊染を繰返して、重苦しい曲節を凝らしてゐる。要するに「冬の日」は比喻とかもぢりとか云ふ言語遊戯を脱しかけてゐる點は一段の進歩と思ふけれど、曲齋の云ふやうに、趣向に巧を求め、句作に紅粉を施してゐて、私共から見ると、一種の美的な世界を空想して、其の情趣に沈醉する風があつて、人生の深刻な現實味に乏しいかと考へるのである。「冬の日」がやがて「猿蓑」におほはれる時代は來るのである。芭蕉の霸氣を収めた、人としての體驗が深くなるだけ、芭蕉の詩は光るのである。

春の日

貞享三年八月「春の日」が出た。撰者は越人とも荷兮とも云はれ詳かでない。井筒屋橋治の俳諧書籍目録に蕉翁撰とあるが、それは誤りであらう。「芭蕉庵春秋」に素蓮云、此一事（春の日版行）芭蕉ニアツカラズト雖、世ニ七部集ト稱スル一書ナレバ、爰ニ其板行ノ時ヲ記スノミ、此一集ヲ七部ノ其一ニ加ヘシハ故人ノ誤ナリ、…とあるけれど、芭蕉が全く知らぬ撰集でもあるまい。本書に芭蕉の名ある連句が見えないからと云うて、版行は芭蕉の關與せぬものであるといふ説は穩でない。書林は京都堀川錦小路上ル町、西村市郎右衛門梓である。西馬の説に、一本ハ江戸ニテノ翻刻ニヤ誤字多シとあるが、余の藏本は半紙本一冊で、寫誤頗る多く、實に惡本であつた。或は此の種のものであらうか。又卷末に出版年月、書林の住所姓名、俳書目録を附した一本もあるが、余の藏本は出版年月を記しただけで、書林の住所姓名、俳書目録がない。蓋し俳書目録を奥附にした一本は後刷のやうである。書林の住所姓名（勿論俳書目録も）のない本の方が古版であらう。

本書収める所、二月十八日附、荷兮、重五、雨桐、李風、昌桂の歌仙一卷（十二句にて止）、三月

六日野水亭にて、且蘂、野水、荷兮、越人、羽笠の歌仙一卷、三月十六日且蘂が田家にとまりて、野水、且蘂、越人、荷兮、冬文(十二句にて止、後は同十九日荷兮室にて卷く)の歌仙一卷、追加、三月十九日舟泉亭、越人、舟泉、殖雪、蝨髭、荷兮面六章、及び四季混題の發句五十九である。内連句には芭蕉の名なく、發句に三句入つてゐる。野水亭の連句面だけあげる。

奈良坂や畑うつ山の八重ざくら
おもしろうかすむかたの鐘野水
春の旅節供なるらん袴着て荷兮
口すゝぐべき清水ながるゝ越人
松風にたふれぬ程の酒のゑひ羽笠
賣残したる蟲はなつ月執筆

發句一例、
元日の木の間の競馬足ゆるし重五
舟くの小松に雪の残りけり且蘂
古池や蛙とびこむ水のおと芭蕉
ほとゝぎすさゆのみ焼てぬる夜哉李風
うれしさは葉がくれ梅の一つかな杜國
「春の日」の調は温籍であり、平淡である。多少叙法の詰つた所も見えるけれど、大體にゆるやか

である。曲齋の云うたやうに、卷の調子は冬の日に異りていと寛なりとあるが、その通りである。

曠野集

曠野は檀木堂荷兮の撰である。元祿二年筒井庄兵衛板である。元祿二年彌生、芭蕉桃青の序。八卷並に員外、三冊物である。卷之一、花、郭公、月、雪の發句。卷之二、歳旦、初春、仲春、暮春の發句。卷之三、初夏、仲夏、暮夏の發句。卷之四、初秋、仲秋、暮秋の發句。卷之五、初冬、仲冬、歳暮の發句。卷之六、雑の發句。卷之七、名所、旅、述懐、戀、無常の發句。卷之八、釋教、神祇、祝の發句。員外連句十卷を収めてゐる。發句が主であるのである。

發句は七百三十五句、作者は宗鑑、忠知、貞室、季吟、芭蕉、其角、去來、杉風、越人、尙白、荷兮、野水、鼠彈、落梧、路通、杜國、素堂等で、荷兮は五十九句、芭蕉三十五句入つてゐる。

何事ぞ花みる人の長刀去來
ほとゝぎすどれからきかむ野の廣き柳風
かげろふや馬の眼のとろくと傘下
草刈て董選出す童哉鷗歩
ちからなや麻刈あとの秋の風越人
こがらしに二日の月のふきちるか荷兮
湖の水まさりけり五月雨去來

連句はすべて十歌仙ある。素堂の句を立句とした野水、荷兮、越人の三吟歌仙一卷、龜洞、荷兮、

昌碧、野水、舟泉、釣雪の六吟歌仙一卷、舟泉、松芳、冬文、荷兮の四吟歌仙一卷、荷兮、野水兩吟歌仙一卷、越人、傘下兩吟歌仙一卷、越人、芭蕉兩吟歌仙一卷、其角、越人兩吟歌仙一卷、嵐雪、越人兩吟歌仙一卷、野水、落梧兩吟歌仙一卷、一井、鼠彈、胡及、長虹四吟歌仙一卷である。内其角と越人の兩吟が勝れてゐる。其角も越人も作意を好む人で、一卷の調子は花やかであり、空想的、情緒的であつて、呼吸がびたりと合ふのである。例へば

空 蟬 の 離^カ 魂^{タマ} の 煩^{イライ} の お そ ろ し き
あ と な か り け る 金 二 万 兩
いとほしき子を他人とも名付けたり
やけどなほして見しつらきかな
酒熱き耳につきたるさゝめごと
全 角 全 人 角

曠野は蕉門の一權威であつた。許六如きは自讃論上に、喜んで求め、晝夜枕とす……、「滑稽傳」に、あら野は俳諧やはらかにして少かるし、「宇陀法師」に、あら野の時はや炭俵、後猿のかるみは急度あらはれたり……と論じてゐる。蓼太の「棚さがし」に、翁の序はありながら、あながちに手傳申されしとも見えぬ……とあるものゝ、どうして杜撰な集と考へられようか。例へば芭蕉の助力が無かつたにせよ、其の當時の名古屋の連衆は十分技倆を備へて居つたのである。芭蕉が序を東武から送つてゐるのでも、芭蕉が此の集に全く無關係だとは考へられない。許六も「宇陀ノ法師」

に、名古屋の荷兮、越人あら野に眼明たるに似たれど……と論ずる位だから、正風に不純な集でもあるまい。曠野を芭蕉の關知せぬ集の如く論ずる者は、荷兮が芭蕉の勘氣を蒙つた説を過信した結果ではなからうか。

ひやう

芭蕉は元祿二年九月奥羽の大旅行を終り、同三年春は湖南の門人の間に日を送つてゐた。本書の成つたのは其の頃である。刊行は六月、井筒屋庄兵衛の版である。撰者は珍碩とも越人とも云はれてゐるが、これは珍碩撰と見るべきである。越人が序を書いてゐる所から考へると、或は越人の助力も多少はあつた事かも知れない。珍碩は近江膳所の人、濱田氏、酒堂とも號、許六の白讃論上によると、一生の行跡さぞく亂墮ならんとあつて、賓斥すべき人物のやうに思はれる。尤も風之の「俳諧耳底記」の序を讀むと、珍碩が芭蕉から「梅の鍵」といふ秘書を譲られたとあつて、どうやら珍碩も支考の亞流のやうに考へられるのである。

本書はすべて連句より成り、五歌仙である。即ち芭蕉、珍碩、曲水の三吟歌仙一卷、珍碩、芭蕉、路通等の歌仙一卷、野徑、里東、泥土、乙州、怒誰、珍碩六吟歌仙一卷、乙州、珍碩、里東、探志、昌房、正秀、及肩、野徑、二嘯九吟歌仙一卷、正秀、珍碩兩吟歌仙一卷を收めてゐる。本書の風調に就いて、去來は贈晋子其角書に、「ひさご」、「猿蓑」を以て奥羽行脚以後芭蕉俳諧の一變風を示す書となし、風國は「泊船集」の序に、瓢、猿蓑出來て、新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ……と論じ、許六は「滑稽傳」に、大方趣猿蓑に等し……とし、支考は「古今抄」に、姿情は凡瓢集

に分れて……と云つてゐる。併し本書は名古屋俳人の間に「冬の日」「春の日」の正風があつたやうに、近江俳人の間に成つた一正風と見るべきで、猿蓑と匹敵すべき撰集ではないのである。たゞ調が猿蓑に近いと云ふだけで、元より發句もなき小冊子である。

五歌仙の内、木の下に汁もの歌仙が最も勝れてゐよう。例へば

物	お	も	ふ	身	に	も	の	喰	へ	と	せ	つ	か	れ	て	翁
月	見	る	顔	の	袖	お	も	き	露							翁
秋	風	の	船	を	こ	は	が	る	波	の	音					翁
鴈	ゆ	く	か	た	や	白	子	若	松							翁
千	部	讀	花	の	盛	の	一	身	田							翁
巡	禮	死	ぬ	る	道	の	か	げ	ろ	ふ						翁

此のあたり情緒もしみぐとして、變化あり、緩急あり、猿蓑に入れても遜色を見ぬ連句である。曲齋は風調凡春の日に似て、最曲節多しと論じてゐるが、曲節多しは少し當らぬかと思はれる。

猿蓑集

芭蕉は元祿三年四月幻住庵に入り、四年の春を粟津の無名庵に迎へ、四月嵯峨の落柿舎に遊んだ。猿蓑は此の間に成つたのである。撰者は去來、凡兆。同年井筒屋庄兵衛開版である。去來の心には奥羽行脚後芭蕉の俳諧も一變した、その新風を代表すべき集がほしい、尾張中心には「冬の日」「春の日」があり、湖南には「ひさご」がある、京にも何か立派な集を残してもよからうといふ考であ

つたらうと思ふ。本書の編輯は餘程嚴重なものであつたらしい。「去來抄」「湖東問答」を見ると、句選の際に、去來、凡兆、其の他の人とも議論があり、相互自説を執つて下らなかつたやうな場合もあり、去來は師翁の説といへども、容易に用ゐず、芭蕉も去來の粗漏を遠慮なく咎めてゐるといふ熱心さであつた。「花屋日記」に、去來が芭蕉の兄松尾半左衛門へ宛てた手紙の中に、猿蓑選成り吟聲の時、わざ／＼深川より鳥羽ノ文臺を取寄せて用ゐたといふ事が見えてゐる程、猿蓑の撰は芭蕉に取つて大切な事であつたのである。尤も之は文曉の小説かも知れないが、かゝる傳説、想像を残すほど本書の慎重さが推知されるのである。撰者去來は向井氏、名は兼時、通稱平次郎、肥前長崎の人、壯年京に住し、武を業としたが、後退隱して嵯峨に落柿舎を營み、後東山南禪寺聖護院の邊に住む。性篤實、芭蕉の愛第と云はれてゐる。寶永元年九月痢病を煩ひ歿。五十三。凡兆は野澤氏、加賀金澤の人、京に住し醫となる。後罪ある人に交り、投獄される。正徳四年歿。猿蓑集は六卷二冊、序は晋其角、跋は丈草、發句三百八十二句（芭蕉四十一句、其角二十五句、去來二十五句、凡兆四十二句、其の他嵐雪、杉風、曾良、智月、乙州、羽紅、史邦、尙白、路通等）、歌仙四卷（去來、芭蕉、凡兆、史邦四吟歌仙一卷、凡兆、芭蕉、去來三吟歌仙一卷、凡兆、芭蕉、野水、去來四吟歌仙一卷、芭蕉、乙州、珍碩、素男十三句成り、智月、凡兆、去來、正秀、半殘、土芳、園風、猿雖、嵐蘭、史邦、野水、羽紅にて卷き終る）、幻住庵記、凡右日記を含んでゐる。本書は古來非常に尊ばれた集で、許六は「宇陀法師」に、前猿蓑は俳諧の古今集也、初心の人去來が猿蓑より當流俳諧に入るべしと稱揚し、支考は「發願文」に、猿蓑集に至りて、全く花實を備ふと論じ、風國も

正風の腸を見せと云ひ、曲齋は風調は地を專にして風韻を主とし、高雅なる物冬日に似ず、曲節なる物瓢に反して、獨當時の一體と見れば、世擧て俳諧の花實全備たりと稱して、爰に止る事しばらくありと論じてゐる。

本書の發句は氣品高く、情趣深く、眞に幽玄閑寂の理想をあらはしてゐる。

初しぐれ猿も小叢をほしげ也
 しぐるゝや黒木つむ家の窓明り
 住つかぬ旅のこゝろや置ごたつ
 ひね麥の味なき空や五月雨
 果もななく瀬の鳴音や秋微雨
 初雁に行燈とるなまくらも
 鉢たゝき來ぬ夜となれば隴也
 知人にあははじくとなれば隴也
 陽炎やほろく落る花見かな
 連句は又天下の龜鑑であり、各時代の準的であつた。はじめの三卷は實に正風の骨髓である。

凡 芭 去 土 同 去 落 史 木 芭 凡 芭
 兆 蕉 來 芳 來 梧 邦 節 蕉 兆 蕉

本書の歌仙市中やの卷に就いて、碓花也蓼和尚に傳つた草稿の一部分がある。それは江三の「むつ

のゆかり」に出てる。参考迄にあげて見よう。

たぬきをおどす篠張の弓史邦
 まひら戸に葛這かゝる宵の月
 人ににもくれず名物の梨來蕉

五六本生木つけたる水たまり
 足袋ふみよこす黒ほこの道
 追たてゝ早き御馬のち刀もち
 てつちか荷ふ糞水こほしけり
 戸障子もむしろかこほの賣屋敷
 てんしやうまもりもいひの賣屋敷
 之は千葉流山町秋元洒汀氏藏の眞蹟本とも違ふのである。

炭俵

本書は野坡、孤屋、利牛の撰。元祿七年、井筒屋庄兵衛、本屋藤助開版である。素龍の序がある。内容は歌仙七卷(芭蕉、野坡兩吟歌仙一卷。嵐雪、利牛、野坡三吟歌仙一卷。孤屋、芭蕉、岱水、利牛四吟歌仙一卷。其角、孤屋兩吟歌仙一卷。桃隣、野坡、利牛三吟歌仙一卷。芭蕉、野坡、孤屋、利牛四吟歌仙一卷。杉風、孤屋、芭蕉、子珊、桃隣、利牛、岱水、野坡等歌仙一卷)、百韻一

卷(利牛、野坡、孤屋三吟)、發句四季二百五十八句を収めてゐる。撰者野坡は志田氏、通稱彌助、越前福井の産、淺生庵、高津翁の號がある。越後屋の手代をつとめる。元文三年正月歿。七十八。利牛は池田氏、通稱十右衛門、越後屋の手代。孤屋は小泉氏、越後屋の手代。

芭蕉晩年の風はかるみであつた。元祿七年九月二十三日意專に與へた手紙の中にも、物體かるみあらはれ大悦不少候とか、或は同年五月子珊の別座敷に於て俳談の折、今思ふ體は淺き砂川を見るが如く、句の形は心ともに輕きなり……などとあつて、最後の正風を此のかるみによつて飾つたのである。此のかるみの影響は餘程流行したのである。元祿七年九月十日、芭蕉が杉風に與へた手紙の中に、上方筋別座敷炭俵にて色めきわたり候……とあるのでも分るのである。即ち炭俵、別座敷續猿蓑と移つて行くけれど、皆之れ炭俵のかるみの延長である。許六は自讃論上に、炭俵の風熟吟せざる人、いかで後猿の風に飛入事を得んやと云ひ、吏登も「七部搜」に、續猿蓑は炭俵にあるなり、……先師も此歌仙が生涯の出來ぢやといはれたげな、此炭俵を曲尺にして置いて、時々の風體はどのやうにもやるがよきなりと説いてゐる。併し此のかるみといふ風は、炭俵は草の調で、最も危い所であると云つた五明の説の如く、皮相に眞似ると卑俗となり、月並に墮して了ふのである。野坡等は手代であるから、世事に馴れ、輕い淡い人情を好んだのだらうが、それが生活體驗に基く感情の脱落で、人格化されてゐないと、詩はたゞ俗な世情を云ふのみで、許六の、胸中せまき者共にて、淺草川に舟逍遙する人の如し、と罵倒される事となるのである。曲齋が「婆心録」に、昔より此集を徒に眞似し人の卷を見るに、たゞ田舎菜に酢をかけたる様にて、其色の青きこそ似たれ、

風味に於ては似るべくもあらず、……と論じてゐるのは卓見である。梅室の徒が、天保に炭俵を覗ふといへども炭俵に等しからずと歎いてゐるのは、田舎菜に酢をかけた仲間であらう。

蓬	菜	に	聞	ば	や	伊	勢	の	初	便	芭	蕉
長	松	が	親	の	名	で	來	る	御	慶	か	な
五	人	扶	持	と	り	て	し	だ	る	柳	哉	同
花	守	や	白	き	か	し	ら	を	突	あ	は	せ
五	月	雨	や	傘	に	つ	け	た	る	小	人	形
文	も	な	く	口	上	も	な	し	粽	五	把	嵐
												雪

發句は野坡二十五、利牛十七、芭蕉十四、其角十四、其他杉風、孤屋、去來、許六、丈草、曲翠、智月等の名が見えるが、一體淺く俗な句多く、引立たない。芭蕉、去來、其角、丈草の句には氣品の高いものもあるが、周圍に押されて見劣りされる損がある。

連句は炭俵調と云つて、淡い輕い洒脫な人生觀が目について、面白い一ふしもあるのである。それも最初の梅が香にの巻、振賣の鴈の巻が秀逸であらう。其角、孤屋兩吟の巻の入つてゐるのはどうしたものか。輕い淡い色へ重い花やかなしみを落すと異様な感が起るのである。

網	の	も	の	近	づ	き	舟	に	聲	か	け	て	利	牛
星	さ	へ	見	え	ず	二	十	八	日	孤	屋	芭	蕉	
ひ	だ	る	き	は	殊	に	軍	の	大	事	也	芭	蕉	

泡 氣 の 雪 に 雑 談 も せ ぬ 野 坡
 明 し ら む 籠 挑 灯 を 吹 消 し て
 肩 癖 に は 湯 屋 の 膏 藥
 上 お き の 干 菜 き ざ む も う は の 空
 馬 に 出 ぬ 日 は 内 で 戀 す る
 抑揚があつて巧なものである。
 續猿蓑

芭蕉歿後五年を経て、即ち元祿十一年本書が出た。版元は井筒屋である。井筒屋の奥書に、本書は何人の撰だか分らない、芭蕉歿後伊賀の兄松尾氏の許にあつたのを懇望して出版したのである、草稿だから書中或は墨消し、或は書入れがあるが、一字一行も改めないとある。

本書に就いて古來支考の偽書であるといふ説が有力であつた。先づ越人は「不猫蛇」に、續猿蓑片腹いたき事、あの様なる埒もなき集、付やうの古き、句の仕様の悪さ、語路のわるさ、翁の句なりと汝が作りて入たる句いかほどかある……といきまき、支考は之を「削掛」に駁し、この集は元祿七の秋、伊賀の東麓庵にて、伊勢より先師の來たるを待て、七八兩月の間の密撰也……集は翁歿後に再び清書も恐れあればと、去來、丈草を兩奉行にて、草稿のまゝに版行したれば、書て消したる所もあり、かたはらに書入れたる所もあり、其時受取版行せし井筒屋も橋屋も今無事にて町住したり、……と返答してゐる。但し此の支考の説は大に割引して聞く必要があるかと思ふ。支考が翁の

密撰を、芭蕉歿後去來、丈草を奉行にして、草稿のまゝ出させるなどといふ事は信じられるものではない。五明の「小夜話」に、右の草稿は也寥といへる和尚今所持して仙臺にあり、此僧は翁の一家の人也、偕其草稿は蓮二坊が手蹟也、然れば蓮二の窃に撰せしものか、……とある。「削掛」では清書するのは恐れ多いから、草稿のまゝ版行したとあるが、五明の説では、支考の筆蹟であるといふのだから、當になりはしない。私の考へる所では、本書は全然支考の偽作だとも思へないし、又全く芭蕉の自選とも考へられない。「花屋日記」、「芭蕉談」の説も信じられないけれど、芭蕉が伊賀から撰集を出さうといふ考はあつたのであらう。それが果さずして死んで了ひ、草稿は伊賀の兄の許へ残されたのだらう。それを支考がきゝつけて手を加へたものらしいと思ふのである。今内容を調べて見ると、支考の勢力があまりにありすぎる。例へば今宵賦を前書にして、自分等の歌仙を入れたり、芭蕉の名月の句を批評した文を入れたり、自分の句が二十四句も入つてゐたり、卷末芭蕉の句の前に自分の句を二句も並べて置く所などは、どうしても芭蕉一人の撰ぢやないのである。併し自撰、偽作いづれにせよ、本書は古來一般に推賞されてゐた。支考は之を法華經に比し、花にして花ならず、實にして實ならんやと稱揚し、許六は自讃論に、さゞるのうまみをぬきて、遺經の俳諧を残せり……と云ひ、去來、風國等之を猿蓑後の一新風と認め、炭俵と合せて論じてゐる。

本書は上下二冊、上卷は連句、下卷は發句である。連句は歌仙五卷（芭蕉、沾圃、馬寛、里圃の四吟歌仙一卷。馬寛、沾圃、里圃三吟歌仙一卷。里圃、沾圃、芭蕉、馬寛四吟歌仙一卷。沾圃、芭蕉、支考、惟然四吟歌仙一卷。支考の今宵賦。附、芭蕉、曲水、臥高、惟然、支考五吟歌仙一卷）、

發句は四季五百十九(芭蕉二十五句、支考二十四句、沾圃十九、其角十三、其の他嵐雪、丈草、去來、曾良北枝、曲翠、土芳等)を収めてゐる。

病僧の庭はく梅のさかり哉
瀧壺もひしげと雉のほろ哉
春の日や茶の木の中の小室節
朝露によごれて涼し瓜の土節
更行や水田の上の天の川
早稲刈て落つき顔や小百姓
野は枯てのばす物なし鶴の首
發句の調は炭俵に似てゐるけれど、炭俵より野趣があつてよい。俗な人事よりも、田園の軽く寂びた句がよろしい。たゞ支考が芭蕉の句を批評した文が目立つて嫌である。連句は猿蓑にもれたるの卷が集中第一である。

盆しまひ一荷で直ぎる鮎の魚
晝寢の癖を直しかねけり
聳が來てにつともせず物語
中國よりの状の吉左右
朔日の日はどこへやら振舞れ
芭蕉
惟然
考然
蕉然

變化に緩急があり、俗な世情や田園の景の取成しが巧に配合されてゐる。續猿蓑の風は炭俵にけおされてゐるやうであるが、此の卷などは別に續猿蓑調と云つてもよからうと考へる。

一重羽織が失てたづぬる
きさんじな青葉の頃ヒトの楓
山に門ある有明の月
蕉然考

昭和二年晩冬

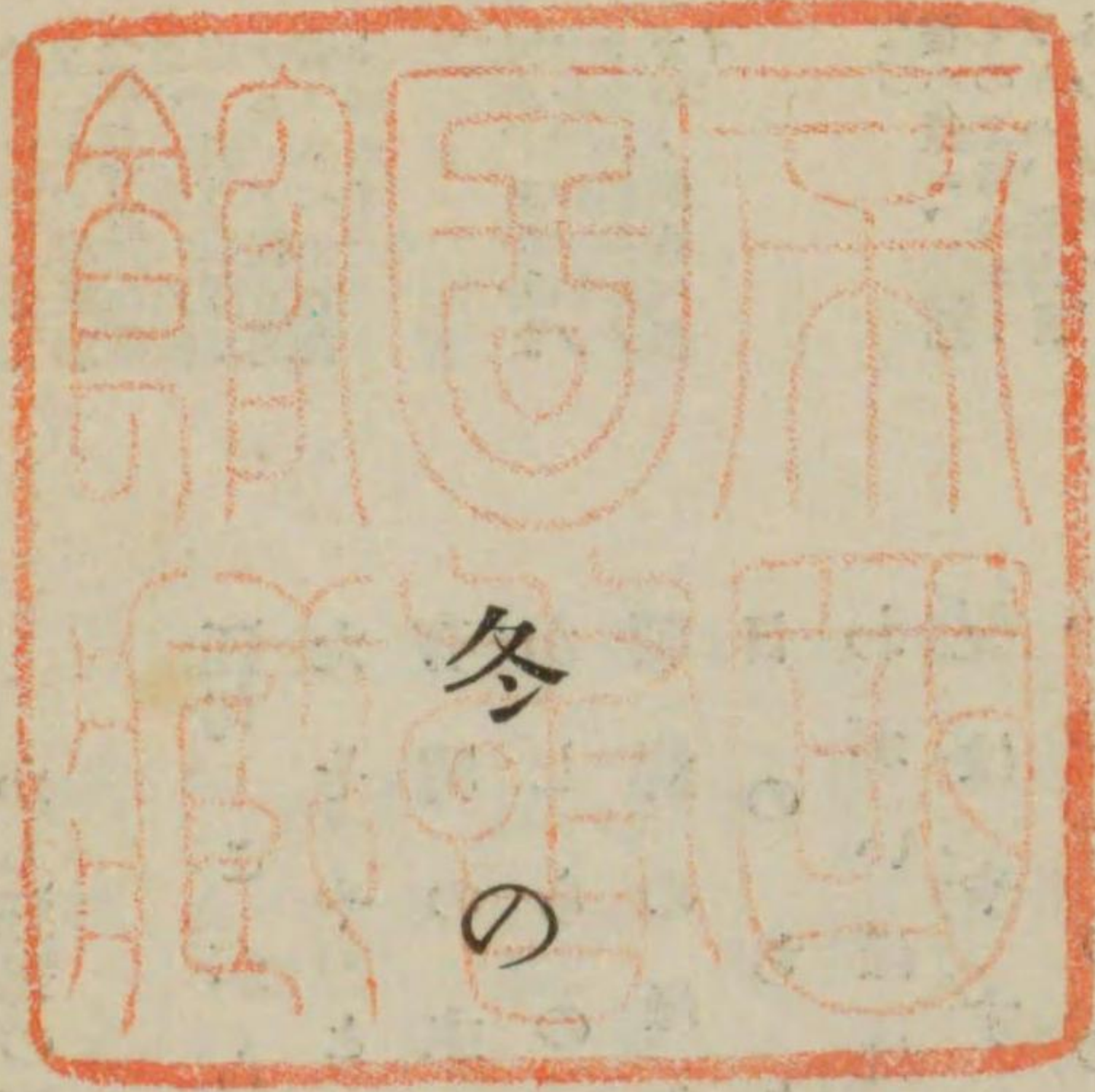
逸民
蘿月

凡例

- 一、本書は西竹文庫本、及び余の所蔵本其の他によつて校訂し、且つ曲齋の「婆心録」、西馬の「標注七部集」、龍守の「校正七部集」等によつて頭註を加へたものである。
- 一、句點、濁點を打ち、假名遣を正し、無理な宛字と思はれるものは假名に直した所もあつた。
- 一、明に誤字と思はれるものは正字に直したが、俗字古字は強ひて改めない。訛言もそのままにして置いた。
- 一、難訓の文字には假名を附けた。
- 一、同訓の文字に國字と漢字とあるが、それは原字に従つた。
- 一、原本の句や前書は時に二行若しくは三行に涉つて書かれてゐる事がある。これは版下の都合上からした事で、木版本では返つて風韻を増すかと思ふけれど、活字本になると間が抜けて、體裁を損ねるものである。併し本書はなるべく原本の體を崩したくない考であるから、體裁は悪くとも、大方原本に従ふ事にした。
- 一、原本は往々萬葉假名を用ゐてゐるが、こゝでは読み易からんため、大方普通の假名に直して置いた。
- 一、詩題、漢字等に就いては、小野機太郎氏の教示を受けた。こゝに厚く小野氏の助力を感謝する。

目次

解題	二
凡例	二四
冬の日	二七
波留濃日	四一
阿羅野	五七
飛さこ	一四九
猿蓑	一六五
すみたはら	二二二
續猿蓑	二七五



冬

の

日

尾張五歌仙

全

日
六

ガク名假ル(八) 心、柿の塔の
イノ直名原。本ニたふト
カデアシキ本ニヤシヲト
ミアルアセシマツル

三篠う櫛か初こ繩月小明日口縁床奥雨桃
線ふぐばぶはつあは三日月をさふのこ花
かかひこぶはなつあみは三太日はをしまた
からくすこにろはなのくあみのかぢりはやぶれ壁落て
ん梢起に餅すくらの春ぞかはゆき
不破柿燭とぼして
の葦(八)さびし
せきびして

重野芭か野杜荷重杜芭重野は荷塾杜正
五水蕉い水國兮五國蕉五水はせを兮水國平

(五) 婆心録ニ、
鮎ト誤たりトア
ニヨルト鮎ハ我
國製作ノ文字デ
このしろトモ
ヨマシタノデア
ル。
(六) 曲齋ハすを湯ト
ヨシデ、
居湯ト假名付在
るハ非也トアル、
(七) 標注ニ、
讀、又瀧トモ云
トアル。

廊綾けわ箕う巾
下ひふがにの跡と木
はとほがい(五)の
藤へ(六)もいの
のか居湯に志まゆかき
げつ花(七)瀧てゆき
たふ也

おもへども壯年
いまだころもを振はず

重荷芭杜 塾 水
五兮蕉國 重杜野荷杜芭荷
五國水兮國蕉兮

(十) 標注云、古本ニ霽ハ書損。和名抄ニ、霽雨、字典ニ小雨也トアル。

命婦の君より米なんどこす
しのぶまのわざとて雛を作り居る
紅花買みちにはほとゝぎすきく
朝月夜双六うちの旅ねして
蕎麥さへ青し滋賀樂の坊
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず
燈籠ふたつになさけくらぶる
らうたげに物よむ娘かしづきて
茶の湯者をしむ野べの蒲公英
馬糞搔あふぎに風の打かすみ
北の御門を初狩人の矢に負て
齒朶の葉を初狩人の矢に負て
こほりふみ行水のいなづま
つゝみかねて月とり落す霽かな

つえをひく事僅に

十歩

杜國

重野荷杜野芭杜重正荷芭野重
五水兮國水蕉國五平兮蕉水五

(九) 又云、小本白雲ト誤タリト。標注ニ、白髮トモ云ヘリトモアル。白紙トモ云ヘリトモ

道すがら美濃で打ける碁を忘る
ねざめくくのさても七十
奉加めす御堂に金うちになひ
ひとつ傘の子下舉りさす
蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮
まどに手づから薄様をすき
月にたてる唐輪の髪の赤枯て
戀せぬきぬた臨濟をまつ
秋蟬の虚に聲きくしづかさ
藤の實つたふ雫ぼつちり
袂より硯をひらき山かげに
ひとり花鸚鵡尾ながの鳥いさ
し九ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いさ

荷重杜芭重野は荷野杜荷重杜芭
兮五國蕉五水を兮水國兮五國蕉

(十一) 婆心録ニ、小木ち
よ、トアヤマル
標注ニ、原本ちり
よ、ナリ、一本ち
アル、ハ非ナリト

まがきまで津浪の水にくづれ行
佛喰たる魚解ホドきけり
縣ふるはな見次郎と仰がれて
五形ケ董の島チ六コ反
うれし氣に嘯る雲雀チりく
眞畫の馬のねぶたがほ也
をかざきや矢矧の橋のながきかな
庄屋のまつをよみて送りぬ
捨し子は柴刈長ツのびつらん
晦日カをさむく刀賣る年
雪の狂吳の國の笠めづらしき
襟に高雄が片袖をとく
あだ人と樽を棺に吞ほさん
芥子のひとへに名をこぼす禪
三ヶ月の東は暗く鐘の聲
殊湖かすかに琴かへす者
烹る事をゆるしてはぜを放ける

荷芭と重芭荷
野水蕉く五蕉兮
杜野芭重芭荷
野水蕉五水兮
杜野芭重芭荷
野水蕉五水兮

(十二) 原本、夜るトアル

聲よき念佛藪をへだつる
かげうすき行燈けしチ起佗て
おもひかかねつチ夜の帯引
こがれ飛たましる花のかげに入
その望の日を我もおなじく

荷野重野荷
はせを兮五水兮

なに波津にあし火焼家は
すゝ氣たれど

重五

(十三) 標注ニ、一本ニ
ニ誤ル。織ハアミ
タルヲ云。カツア
賣スルナリトアル
(十四) 又云、微ナリ。古
木微ハ書損トアル

炭賣のをのがつまこそ黒からめ
ひとの粧ひを鏡磨ヤ寒
花棘馬骨の霜に咲かへり
鶴見るまどの月かすかなり
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日
萩チ織るかさチを市チに振チする
賀茂川や胡磨千代祭チりチ微チ近チみ

荷野杜荷
芭蕉水國兮
羽笠蕉水國兮

(十九) 標注ニ、和名抄ニ
大豆、又白角豆
ナリ。古本ノ小角
セリテハ小坊ニ打コ
アル。

骨を見て坐に泪ぐみうちかへり
乞食の蓑をもらふしのゝめ
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て
御幸に進む水(十九)のみくすり
ことにてる年の小角豆の花もろし
萱屋まばらに炭團つく白
芥子あまの小坊交りに打むれて
をるゝはすのみたてる蓮の實
しづかさに飯臺のぞく月の前
露おおくきつね風やかなしき
釣柿に屋根ふかれたる片庇
豆腐つくりて母の喪に入
元政の草の袂も破ぬべし
伏見木の幡の鐘はなをうつ
いろふかき男猫ひとつを捨かねて
春のしらすの雪はきをよぶ
水干を秀句の聖わかやかに

芭蕉 荷 杜 重 野 羽 杜 重 芭 荷 羽 野 重 杜 荷 芭
蕉 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國

(十八) 標注ニ、牢興トア
ル。

冬(十八)の朝日のあはれなりけり
檜ツ山の家の體を木の葉降
ひきずるうしの鹽こぼれつゝ
音もなき具足に月のうすく
酌とる童蘭切にい
秋のころ旅の御連歌いかりに
漸くはれて富士みゆる寺
寂シヤクとして椿の花の落る音
茶に糸遊をそむる風の香
雉追に烏帽子の女五三十
庭に木曾作るこひの薄衣
なつふかき山橋にさくら見ん
麻かりといふ哥の集あむ
江を近く獨樂菴と世を捨てる
我月出よ身はおぼろなる
籠(十八)興コび衣笛に落花を打拂
籠ヲ興ヲゆるす木瓜の山あひ

芭蕉 荷 杜 重 野 羽 杜 重 芭 荷 羽 野 重 杜 荷 芭
蕉 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮 兮
水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國 水 五 國

山茶花匂ふ笠のこがらし

うりつ

追加

羽笠

いかに見よと難面うしをうつ霰
樽火にあぶるかれはらの松
とくさ刈下着に髪をちやせんして
檜笠に宮をやつす朝露
銀に蛤かはん月は海
ひだりに橋をすかす岐阜山

荷兮 重五 杜國 芭蕉 埜水

(二十) 小本ノ一本ニ貞享
甲子歳ヲ落トス

(三十) 貞享甲子歳

京寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

波留濃日

全

(九) 標注ニ、一本蚊ヤ
ル。してニ誤ルトア

里萩旅何鱈曉表菊筥賣松口春おなら
人ふ衣や負町あ白の風すのもしら
にみあたたら聞ん我國の濱にけり
薦を施す万日のほはら
を施す万日のほはら

越野羽越且荷越且野執羽越荷野
人水笠人藁兮人藁水筆笠人兮水

三月六日野水亭にて

且藁

(六) 婆心録ニ、
けりト誤たりトア
ル。小本ニ、けりトア
(七) 一本、なしてノシ
ヲ落トス。
(八) 標注ニ、朝熊伊勢
ナリ。朝熊ノ替ニ
西行谷アリ。異本
ニコノ句誤寫甚シ
トアル。
婆心録ニ、
を脱し、
朝熊おくりト誤た
りトアル。
小本ニ、朝熊送り
出。ほくトア

弟い記か世釣ほ朝傘我穂念朝は松い
もく念に瓶と熊の名蓼佛朗だのともか
兄春念にあひお内を生さ豆腐の木の
も花もはとする近橋の蔵をを宮司が
鳥竹とに嵯峨の萱畑
とりいそがしく
にゆく

李昌重雨昌荷雨李荷重李昌重雨昌
風圭五桐圭兮桐風兮五風圭五桐圭

(二十) 婆心録、入上ヲ再
 板ノアヤマリトシ
 入むトスル。
 (二十一) 標注ニ、異本、一
 本トモニ見え過ぬ
 ト作ル、非ナリトぬ

(十九) 西馬ノ標注、世の
 中ハトスル。婆心
 録、之ヲ再板ノア
 ヤマリトスル。ア
 一本世の中にトア

(十五) 婆心録ニ、お
 りむト誤たりトア

(十六) 一本、二ノ表ノ二
 ノ字ヲツケル。
 (十七) 標注ニ、茸生ふる
 也。一本草ニ誤ト
 アル。
 (十八) 浪鷗トアヤ

蝶 山 追 加
 水 吹 の あ ぶ な き 岨 の く づ れ 哉
 の み に お る ヲ 岩 は し

三月十九日舟泉亭。

越 人

舟 泉

む さ ぼ り に 帛 着 て あり く 世 の 中 は
 庭 二 枚 も ひ ろ き 我 庵
 朝 毎 の 露 あ は れ さ に 麥 作 ル
 暮 う ち を 送 る き ぬ づ の 月
 風 の な き 殊 の 日 舟 に 網 入 よ
 鳥 羽 の 湊 の を ど り 笑 ひ に
 あ ら ま し の ざ こ ね 筑 摩 も 見 て 過 ぬ
 つ ら く 一 期 聾 の 名 も な し
 我 春 の 若 水 汲 に 晝 起 て
 餅 を 喰 つ ヲ い は ふ 君 が 代
 山 は 花 所 の こ ら ず 遊 ぶ 日 に
 く も ら ず て ら ず 雲 雀 鳴 也

冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文
 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文
 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文

岩 瀧 連 紹 簀 永 春 跡 別 初 秋 咲
 苔 壺 歌 鷗 の き 行 ぞ の 雁 の わ け
 と に の が の 日 道 花 の 雁 の け の
 り 柴 と 瓢 茸 今 朝 の 宮 月 聲 菊
 の 押 に は 生 朝 宮 月 聲 菊 には
 籠 ま あ 有 朝 宮 月 聲 菊 には
 に げ 有 有 朝 宮 月 聲 菊 には
 さ 音 と そ は 雨 の 中 順
 げ ら め が な く 中 順
 れ ん し く 中 順

今宵は更たりとてやみぬ。
 同十九日荷兮室にて

冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文
 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文
 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文

冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文 冬 越 人 文

朝日二分柳の動く匂ひかな
 先明て野の末ひくき霞哉
 芹摘とてこけて酒なき瓢哉
 みかへれば白壁いやし夕がすみ
 古池や蛙飛びこむ水のほと
 傘張の睡り胡蝶のやどり哉
 山や花壇根くくの酒はやし
 花にうづもれて夢より直に死んかな
 春野吟。

足跡に櫻を曲る菴二つ
 麓寺かくれぬものはさくらかな
 榎木まで櫻の遅きながめかな
 饑別。

藤の花たぐうつふいて別哉
 山畑の茶つみをかざす夕日かな
 蚊ひとつに寝られぬ夜半ぞ春のくれ

荷同 荷重 越 荷李杜 越 龜重芭越 且同 荷
 人 兮風國 人洞五蕉人 藥 兮

(二十二)
 龍守ノ校正、扉々
 トスル。

昌陸の松とは盡ぬ御代の春
 元日の木の間の競馬足ゆるし
 初春の遠里牛のなき日哉
 けさの春海はほどあり麥の原
 門は松芍薬園の雪さむし
 鯉の音水ほの闇く梅白し
 舟くの小松に雪の残りり
 曙の顔牡丹霞にひらきけり
 腰てらす元日里の睡りかな
 星はらくかすまぬ先の四方の色
 けふととも小松負ふらん牛の夢

きさらぎや餅酒すべき雪ありて
 行幸のため洗ふ土器
 朔日を鷹もつ鍛冶のいかめしく
 月なき空の門はやくあけ

利重 昌重 雨昌重 舟雨昌重 羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重
 杜 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重
 犀 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重
 呑 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重
 聽 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重 且羽舟雨昌重
 雪霞夕國藥笠泉桐圭五重 執荷蝨聽 筆兮鼯雪

(二十三)
一本、明也トアル。

(二十四)
一本、黒きニアヤ
マル。

夏

ほとゝぎすその山鳥の尾は長し
郭公さゆのみ焼^{タキ}てぬる夜哉
かつこ鳥板屋の背戸の一里塚
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉
若竹のうらふみたる雀かな
傘をたゝまで螢みる夜哉
武藏坊をとふらふ。

逢坂の夜は笠みゆるほどに明^(二十三)て、
空の衣川

馬かへておくれたりけり夏の月
老聃曰、知足之足常足。

夕がほに雑炊あつき藁屋哉
箒木の微雨こぼれて鳴蚊哉
はゝき木はながむる中に昏にけり
萱草は随分暑き花の色

蓮池のふかさわするゝ浮葉かな
曉の夏陰茶屋の遅きかな
夏川の音に宿かる木曾路哉

譬喩品ノ三界無安猶如火宅
といへる心を、

六月の汗ぬぐひ居る臺かな

秋

背戸の畑なすび黄ばみてきりくす
貧家の玉祭

玉まつり柱にむかふ夕かな
雁きゝてまた一寐入する夜かな
雲折く人をやすむる月見哉

山寺に米つくほどの月夜哉
瓦ふく家も面白や秋の月

八嶋をかける屏風の繪をみて、
具兄着て顔のみ多し月見舟

全

野越芭雨越 且 越 重昌 荷塵柳越 聽 商 舟龜杜越李九
水人蕉桐人 藁 人 五圭 兮交雨人 雪 露 泉洞國人風白

(二十五)
標注ニ、異本ニ具
足看タトアル。誤
寫ナリトアル。

具兄着て顔のみ多し月見舟

全

野越芭雨越

且

越

重昌

荷塵柳越

聽

商

舟龜杜越

李九

風白

雪

露

泉洞國人

風白

待戀。

こぬ殿を唐黍高し見おろさん
閑居増戀。

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな
朝顔はすゑ一りに成にけり

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ
芭蕉翁を宿し侍りて、

霜寒き旅寐に蚊屋をきせ申
雪の原蕪の子の薄かな

馬をさへながむる雪のあした哉
行燈の煤けぞ寒き雪のくれ

芭蕉翁をおくりてかへる時、

此比の氷ふみわる名残かな
あたらしき茶袋ひとつ冬籠

(二十六)
貞享三丙刀年仲秋下浣

書林

京堀川通錦小路上ル町
西村市郎右衛門

(二十六)
標注ニ貞享三丙寅
年仲秋下浣トア
中六部ハ井筒庄
兵衛板ノ市郎右衛門
門ノ西村又一本
ハ江ナリ。又一本
ヤ。誤字多シ刻ニ
ル。標注、多シ刻ニ
一。本。標注、多シ刻ニ
所。姓名ガナシ。

(二十七)
一本、奥附ガナイ

(二十七)
芭蕉翁門俳書目録

みなしくり	其角輯	二册	丙寅記行	風瀑集	一册
續みなしくり	同輯	二册	新山家	其角輯	一册
花つみ	同輯	二册	續花つみ	湖十輯	二册
その袋	嵐雪輯	二册	春の日	越人	一册
蛙あはせ	芭蕉其角 素堂仙化輯	一册	柿筵	宗瑞 咫尺	一册
新二百韻	其角輯	一册	長樂寺千句	丈石	一册
皮籠摺	涼兔輯	二册	千栽堂百歌仙集	丈石	五册
挑諧小傘	初心之仕様 調寶數々條集記	一册	俳諧書籍目録		三册

阿羅野

上、下、員外

尾陽蓬左、檀木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひととせ此郷に旅寐せしをりくの云捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ打續て、春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着、やよひの空のけしき、柳櫻の錦を争ひて小鳥のおのがさまぐなる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。いとふのいとかすかなる心のはしの、有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにゝもつかず。雲雀の天空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべし。

元祿二年彌生

芭蕉 桃青

荒野集 目録

（一）
小本ノ一本ニ、目録、卷數ヲヌカス。

- 卷之一 花 郭公 月 雪
- 卷之二 歳旦 初春 仲春 暮春
- 卷之三 初夏 仲夏 暮夏
- 卷之四 初秋 仲秋 暮秋
- 卷之五 初冬 仲冬 歳暮
- 卷之六 雜
- 卷之七 名所 旅 述懷 戀 無常
- 卷之八 釋教 神祇 祝
- 員外

標注ニ、一本ニお
そし作ル。原
ニおしナリ。原
ほしノ假名ノ誤カ
トアル。

ちるはなは酒ぬす人よく
冷汁に散てもよしや花の陰
はつ花に誰が傘ぞいまし
柴舟の花咲にけり宵の雨
をるときになりて逃けり花の枝
連たつや従弟はおうし花の時
疱瘡の跡まだ見ゆるはな見哉
あらけなや風車賣花のとき
花にきてうつくしく成心哉
山あひのはなを夕日に見出したり
おもしるや理窟ばなしに花の雲
なりあひやはつ花よりの物わすれ
獨來て友選びけり花のやま
花鳥とこけら葺る尾上かな
首出し岡の花見よ蛇とり
酒のみ居たる人の繪に、
月花もなくて酒のむひとり哉

舟 胡 長 鳥 下 傘 薄 心 越 野 冬 冬 荷 芭
泉 及 虹 枝 步 兮 下 芝 っ 苗 人 水 松 文 兮
蕉

津 鳥 岐 阜

原本半紙形、縦七
寸五分、横五寸三
分。表紙白茶。上三
十九丁。下三十丁。
員外三十丁。

曠野集 卷之一

花三十句

よしのにて、

これはく とばかり花の芳野山
我まゝをいはする花のあるじ哉
薄曇りけだかくはな林かな
はなのやまどことらまへて哥よまむ
暮淋し花の後鬼瓦
山里に喰ものしひる花見かな
何事ぞ花みる人の長刀
みねの雲すこしは花もまじるべし
はなのなか下戸引て来るかいな哉
下々の下の客といはれん花の宿
はなの山常折くぶる枝もなし
見あげしがふもとに成ぬ花の瀧
兄弟のいろはあげけり花のとき

貞 路 信 晨 友 尙 去 野 龜 越 一 俊 鼠
室 通 德 風 五 白 來 水 泪 人 井 似 彈

津 鳥

(三) 標注ニ、二十句ナ
アレドモ十九句ナ
リ。落句アルニヤ。
可惜トアル。

(四) 標注ニ、野の廣さ
トアレド、古木廣
キトアツテ、キノ
字上少シカケル。

ある人の山家にいたりて、
櫃の木のはなにかまはぬすがた哉

(三) 杜宇二十句

ほととぎすを飼おくものに、
求得て放やるときに、

鳥籠の憂目見つらん郭公
目には青葉山ほととぎす初がつほ
いそがしきなかに聞けり蜀魂
蠟燭のひかりにくしやほととぎす
おひし子の口まねするや時鳥
跡や先氣のつく野邊の郭公
ほととぎすどれからきかむ野の廣(四)き
ある人のもとにて、發句せよと
有ければ、
ほととぎすはぐかりもなき鳥かな
晴ちぎる空鳴行やほととぎす

津

鳥

季素釣越松重柳
吟堂雪人下五風
落鼠梧
彈

同

蚊屋臭き寐覺うつや時鳥
三聲ほど跡のをかしや郭公
淀にて、

ほととぎす十日もはやき夜舟哉
嬉しさや寐入らぬ先のほととぎす
あふなしや今起て聞郭公
くらがりや力がましきほととぎす
馬と馬よばりあひけり郭公
たゞありあけの月ぞのこ
れると吟じられしに

哥がるたにくき人かなほととぎす
うつかりとらうつぶきるたり時鳥
うつかりと春の心ぞほととぎす

月三十句

かるくと笹のうへゆく月夜哉
それがしも月見る中の獨かな

岐阜

風泉
傘雨
同下
鈍可

大津

智月
李桃
市山

十二歳

梅舌
湍水

(六)もなしノ字少
シ缺ケル

何日とも見さだめがたや宵の月
 夕月夜あんどんけしてしばしみむ
 何事の見たてにも似ず三かの月
 見る人もたしなき月の夕かな
 暮いかに月の氣もなし(六)海の果
 影ふた夜たらぬ程見る月夜哉
 朔日
 名月や海もおもはず山も見ず
 めいげつや下戸と下戸とのむつまじき
 めいげつはありきもたらぬ林かな
 宵に見し橋はさびしや月の影
 十三夜
 一つ(五)の月もあとを忘れて哀也
 同去來
 胡及雪
 釣一髮
 杉風
 荷兮
 全
 芭蕉
 伊豫一
 泉
 ト
 枝

(五)心字少シ缺ケル

月ひとつはひとりがちの今宵哉
 雨の月どこともなしの薄あかり
 けうとさに少脇むく月夜哉
 屋わたり(五)の宵はさびしや月の影
 をかまげにほめて詠る月夜哉
 どこまでも見とほす月の野中哉
 峠迄硯抱て月見かな
 一つ屋やいかいこと見るけふのつき
 名月は夜明るきはもなかりけり
 名月やとしに十二は有ながら
 名月やかいつきたてつなぐ舟
 めいげつやはだしでありく草の中
 名や鼓の聲と犬のこゑ
 見るものと覺えて人の月見哉
 名月の心(五)いそぎに
 むつかしと月を見る日は火も焼かじ
 津越一
 昌越人
 市昌碧
 一市昌碧
 長虹髮柳
 任他虹髮柳
 龜洞他虹髮柳
 越人洞他虹髮柳
 文鱗人洞他虹髮柳
 昌昌碧
 傘下碧
 二傘下碧
 野水水
 荷兮
 水水

夜の雪おとさぬやうに枝折らん
 ゆきの日や川筋ばかりほそくと
 初雪やおしにぎる手の奇麗也
 雪の江の大舟よりは小舟かな
 雪の朝かさら鮭わくは鷹の聲
 ちの暮猶さらやけしや鷹の聲
 はつら雪や淡草かゝる隣で
 はかつら雪や先草のみにて
 舟はかけていれくかふれども海
 舟はかけていれくかふれども海

岐阜

除鷺傘芳冬桂荷路野芳
 風汀下川文夕兮通水川

(七) 原本、銀川トアル。

(八) 原本、夜るトスル。

雪の日はや船頭どのゝ顔の色
 いざゆかむ雪見にくるぶ所まで
 竹の雪落て夜ななく雀かな
 かさなるや雪のある山只の山
 車道雪なき冬のあしたかな
 はつ雪を見てから顔を洗けり
 はつ雪に戸明ぬ留守の菴かな
 ものかげのふらぬも雪の一つ哉
 くらき夜に物陰見たり雀かな
 雪降て馬屋にはいる雀かな

雪二十句
大津にて

加京

賀

其芭塵加小越是人春生交蕉角
 其芭塵加小越是人春生交蕉角
 其芭塵加小越是人春生交蕉角

岐阜

一

髮

岡崎

鶴

聲

あけぼのや鶯とまるはね釣瓶
 鶯の鳴や餌ひろふ片手にも
 うぐひすの鳴そこなへる嵐かな
 梅の木になほやどり木や梅の花
 梅折てあたり見廻す野中かな
 華もなきむめのずばえぞ頼もしき
 みのむしとしれつる梅のさかり哉
 網代民部の息に逢て

伊賀 長良 岐阜 加賀 津島
 一去若芭 蕉冬一落越鷗玄素藤小俊野
 桐來風蕉 笠松髮梧人歩察秋羅春似水

(九)
 標注ニ、古本賢ハ
 書損カトアル

あひくくに松なき門もおもしろや
 大服は去年の青葉の匂哉
 鶯の聲聞まるれ年をとこ
 傘に齒朶かゝりけりえ方だな
 袖すりて松の葉契る今朝の春
 たてゝ見む霞やうつる大かゞみ
 曙は春の初やだらう(九)ぶくら
 はつ春のめでたき名なり堅魚く
 初夢や濱名の橋の今のさま
 しづやしづ御階にけふの麥厚し
 萬歳のやどを隣に明にけり
 巳のとしやむかしの春のおぼつかな
 我は春日かどに立るまつ毛哉
 我等式が宿にも來るや今朝の春

僧 犬山
 越 貞般同同荷同越同野梅夕昌防柳
 人 室齋 兮 人 水舌道勝川風

初春

若菜つむ跡は木を割畑哉

曉の釣瓶にあがるつばきかな
同
 藪深く蝶氣のつかぬつばき哉
春 雨
 はる雨はいせの望一がこより哉
同
 春の雨弟どもを呼でこよ
白尾鷹
 はやぶさの尻つまげたる白尾哉
 蜘蛛の園に春雨かゝる雫かな
 立白に若草見たる明屋哉
 すごくと親子摘けりつくくし
 すごくと摘やつまずや土筆
 すごくと案山子のけけり土筆
 土橋やよこにはへたるつくくし
 川舟や手をのべてつむ土筆
 つくくし頭巾にたまるひとつより

荷 兮
 下 泉
 舟 泉
 傘 下
 荷 兮
 路 通
 傘 下
 芭 蕉
 冬 文
 塵 交
 野 水
 梅 舌
 夢 々
 市 柳
 一 笑
津 島

鶯にちいさき藪も捨られじ
 うぐひすの聲に脱たる頭巾哉
 鶯になじみもなきや新屋敷
 うぐひすに水汲こぼすあした哉
 さとかすむ夕をまつの盛かな
 行くと程のかはらぬ霞哉
 行人の叢をはなれぬ霞かな
 かれ芝やまだかげろふの一二寸
 かげろふや馬の眼のとろくと
 水仙のえる間を春に得たりけり
 蝶鳥を待るけしきやものゝ枝
當座題
さし木
 つきたかと兒のぬき見るさし木哉
接木
 つまの下かくしかねたる繼穂かな
椿

荷 兮
 路 通
 傘 下
 芭 蕉
 冬 文
 塵 交
 野 水
 梅 舌
 夢 々
 市 柳
 一 笑
津 島

蘭亭の主人、池に
鵝を愛せられし

は、筆意有故也。

池に鵝なし假名書習ふ柳陰
風の吹方を後のやなぎ哉
何事もなしと過行柳哉
さし柳たゞ直なるもおもしろし
尺ばかりはやたばみぬる柳哉
すがれく柳は風にとりつかむ
とりつきて筏をとむる柳哉
さはれども髪のがまぬ柳哉
みじかくて垣にのがるゝ柳哉
ふくかぜに牛のわきむく柳哉
吹風に鷹かたよするやなぎ柳哉
かぜふかぬ日はわがなりの柳哉
いそがしき野鍛冶をしらぬ柳哉
蝙蝠にみだるゝ月の柳哉

(二〇)
原本
編幅
トスル

素野越一小一昌杏此杏松校荷同
堂水人笑春笑碧雨橋雨芳遊兮

青柳にもたれて通す車哉
引いきに後へころぶ柳かな
菊の名は忘れられたども植にけり

素鷗生
秋歩林

仲春

麥の葉に菜のはなかゝる嵐哉
菜の花や杉菜の土手のあひくに
なの花の座敷にうつる日影哉
菜の花の畦うち残すながめ哉
うごくとも見えで畑うつ麓かな
万歳を仕舞うてうてる春田哉
つばきまで折そへらるゝさくらかな
廣庭に一本植しさくら哉
ときぐは蕤干さくら咲にけり
手のとゞくほどはをらるゝ櫻哉
うしろより見られぬ岨の櫻哉
すごくと山やくれけむ遅ざくら

不悔虹下洞來碧人艸風橋松髮
長傘清去昌越笑除一冬一



何の氣もつかぬに土手の董哉
 ねぶたしと馬には乗らぬ董草
 ほうるくのと土とる跡は董かな
 晝ばかり日のさす洞の董哉
 草刈て董選出す董かな
 行蝶のとまり残さぬあざみ哉
 麥畑の人見るはるの塘かな
 はげ山や隴の月のすみ所
 ほろくと山吹ちるか瀧の音
 松明にやま吹うすし夜のいろ
 山吹とてふのまぎれぬあらし哉
 一重かたと山吹のぞくゆふべかな
 とりつきてやまぶきのぞくいはね哉
 あそぶともゆくともしらぬ燕かな
 去年の巢の土ぬり直す燕かな
 いまきたといはぬばかりの燕かな
 燕の巢を覗行すゞめかな

忠 荷 野 舟 鷗 燭 杜 芭 野 卜 襟 蓬 去 俊 長 長 虹
 知 兮 水 泉 步 遊 國 之 蕉 水 枝 雪 雨 來 似 之 虹

同 岐 大 阪

(一) 飛入
 (二) 標注ニ、古本不關
 トと飛入ルニ作。書損也。

暮 春

はる風にちからくらぶる雲雀哉
 あふのきに寐てみむ野邊の雲雀哉
 高聲につらをあかむる雉子かな
 行かゝり輪解てやる雉子哉
 手をついて哥申あぐる蛙かな
 鳴立ていりあひ聞ぬかはづかな
 あかつきをむづかしさうに鳴蛙
 いくすべり骨をる岸のかはづ哉
 飛入してしばし水ゆく蛙かな
 不圖とびて後居なほる蛙哉
 ゆふやみの唐網に在る蛙かな
 はつ蝶を兒の見出す笑ひ哉
 梭欄の葉にとまらで過る胡蝶哉
 かやはらの中を出かぬることふかな
 かれ芝や若葉たづねて行胡蝶

野 除 一 鹽 宗 落 越 去 落 松 柳 梅 炊 百
 水 風 雪 車 鑑 梧 人 來 梧 下 井 風 餌 玉 歲

津 嶋 山 崎

(二二)の
原本、搥干トスル。

曠野集 卷之三

初 夏

ころもがへや白きは物に手のつかず
更衣襟もをらずやたゞくさに
ころもがへ刀もさして見たき哉

釋

鼠傘路
彈下通

肖柏老人のもちたまひしあらし山といふ
香を、馬のはなむけに文鱗がくれける
とて、雪の朝越人が持きたるを忘れが
たく、明てわか葉の比、文鱗に申つかはしける。

鬚に焼香もあるべしころもがへ

山路にて

なつ來てもたゞひとつ葉のつた
いちのはつはをとこなるらんかきつばた
柿の木のいたり過たる若葉哉
切かぶのわか葉を見れば櫻哉
若葉からすぐにながめの冬木哉

同 岐

藤不越一芭 荷
蘿交人井蕉 兮

黄 昏 に た て だ さ れ た る 燕 哉
友 滅 て 鳴 音 か い な や 夜 の 鴈
角 落 て や す く も 見 ゆ る 小 鹿 哉
な ら 漬 に 親 よ ぶ 浦 の 汐 干 哉
お や も 子 も 同 じ 飲 手 や 桃 の 酒
人 霞 む 舟 と 陸 と の 汐 干 かな
山 ま ゆ に 花 咲 か ぬ る 躑 躅 かな
隴 夜 や な が く て し ろ き 藤 の 花
篝 火 に 藤 の す け ぬ 鶴 舟 かな
永 き 日 や 鐘 突 あ と も ぐ れ ぬ 也
永 き 日 や 油 し め 木 の よ わ る 音
行 春 の あ み 鹽 か ら を 残 し け り

三

輪

同 野 卜 龜 兼 荷 友 傘 越 蕉 且 鼠
水 枝 洞 正 兮 重 下 人 笠 藥 彈

(二三)
ル。本、鹽引てトア

宵の間は笹にみだるゝ螢かな
刈草の馬屋に光るほたるかな
窓のくらき障子をのぼる螢哉
闇きよりくはれぬ澤の螢かな
道細く追はれぬ澤の螢かな
あめの夜は下ばかり行螢かな
くさかりの袖より出るほたる哉
水汲て濡たる袖のほたるかな
こゝらかとのぞくあやめの軒端哉
蚊のむれて柵の一木の曇けり
かやりに火に寐所せまくなりけり
雨のくれ傘のぐるりに鳴蚊かな
蚊の瘦て鎧のうへにとまりけり
藻の花をかつける蚤の鬢かな
汐(二三)引て藻の花しぼむ暑さかな

はじめて葎室をとぶらはれける比

仲夏

櫻井

元 一 不 風 青 含 鷗 秋 小 杏 二 一 胡 兒
輔 髮 交 笛 江 咕 枝 步 芳 春 雨 水 笑 及 竹

わけもなくその木くの若葉哉
ひらくとわか葉にとまる胡蝶哉
ゆあびして若葉見に行夕かな
はげ山や下行水の澤卯木
上ゲ土にいつの種とて麦一穂
枯色は麦ばかり見る夏の哉
麥かりて乘の木ばかり残りけり
むぎからにしかるゝ里の葵かな
しら芥子にはかなや蝶の鼠いろ
鳥飛であぶなきけしの一重哉
けし散て直に實を見る夕哉
大粒な雨にこたへし芥子の花
散たびに兒ぞ拾ひぬ芥子の花
菴の夜もみじかくなりぬすこしづゝ
さびしさの色はおぼえずかつこ鳥

深川の庵にて

作者

岐阜

龜 竹 鈍 夢 支 生 不 鈍 嵐 落 李 東 吉 野
洞 洞 可 々 寮 林 知 可 蘭 梧 桃 巡 次 雪 水

綿釣麻虫直か引連すは
 の鐘のほ垂た立あみら
 花草のしををびてまき
 た後露やぬがは馬にり
 まに皆幕がはの待たて
 く付たこぼれけり馬の
 蘭名なるべし
 似るかな

岐
 素越李ト一尙潦文俊長
 堂人晨枝髮白月瀾似虹

河笠蓮吹す挑涼飛おは簾涼す夕雲楠
 骨をみちち燈し石もきしてし立のも
 に着むりしのさ庭してさ立の峯動
 水みむりしのさ庭してさ立の峯動
 のなみにさかやきは蓮に暮にけり
 われ行ながれ哉

松 岐 津 鳴
 坂 阜 嶋 海
 芙古晨秀未ト同俊如同荷去 玄 傘 野 昌
 水梵凰正學枝 似風 兮來印 下 水 碧

曠野集 卷之四

初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風
梧の葉やひとつかぶらん秋の風

松嶋雲居の寺にて

一葉散音かしましきばかり也

かたびらのちむや秋の夕げしき

男くさき羽織を星の手向哉

朝貌は酒盛しらぬさかりかな
葬や垣ほのまゝのじだらくさ

あさがほの白きは露も見えぬ也

子を守るものいひし詞の句に
朝顔をその子にやるなくらふもの
隣なるあさがほ竹にうつしけり
あさがほやひくみの水に残る月

なりて

津

鳥

圓越 仙人 化解

方杏 芭蕉 文鱗 荷鱗

同 鷗步 胡及

(二六)
原本、葉よりノよ
全ク缺ケル。

葉より葉にものいふやうや露の音

秋風やしらきの弓に弦はらん

涼しさは座敷より釣鱸スズキかな

畦道に乗物すゆるいなばかな

まつむしは通る跡より鳴にけり

きりくす燈臺消て鳴にけり

あの雲は稲妻を待たより哉

いなづまやきのふは東けふは西

ふまれてもなほうつくしや萩の花
ひよろくと猶露けしや女郎花
棚作ルはじめさびしき葡萄哉
草ぼうくからぬも荷ふ花野哉
もえきれて昏燭をなぐる薄哉
行人や堀にはまらんむら薄

宗祇法師のこと葉によりて

名もしらのぬ小草花咲野菊哉
としくのふる根に高き薄哉

伏見者

鼠去昌一素芭其舟芭 素秋 髮汀長來彈
俊素 胡荷任不芭舟其芭素一鷺昌去鼠
似堂 及兮口知蕉泉角蕉秋髮汀長來彈

暮 秋

一山路のきく野菊とも又ちがひけり
なにとなく植しが菊の白き哉
しらの菊のちらぬぞ少口をしき
山路のきく野菊とも又ちがひけり
色や作らぬ菊のはなざかり

曉越昌巴
颯人碧丈

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか
一本の蘆の穂瘦しるせき哉
松の木に吹あてられな秋の蝶
はつとして寐られぬ蚊屋のわかれ哉
心にもかゝらぬ市のきぬたかな
關の素牛にあひて
さぞ砧孫六やしき志津屋敷
よしのにて
きぬたうちて我にきかせよ坊がつま
いそがしや野分の空の夜這星

加賀 一 芭 其 角
曉胡舟防越
颯及泉川人

素堂へまかりて

かれ枝に鳥のとまりけり秋の暮
つくぐと繪を見る秋の扇哉
谷川の茶袋そぐ秋のくれ
石切の音も聞けり秋の暮
斧のねや蝙蝠出るあきのくれ
鹿の音に人の貌みる夕哉
田と畑を獨りにたのむ案山子哉
山賤が鹿驚作りて笑けり
紅葉にはたがをしへける酒の間
しらぬ人と物いひて見る紅葉哉
藪の中に紅葉みじかき立枝哉
どことなく地にはふ蔦の哀也
わが宿はどこやら秋の草葉哉
わが草庵にたづねられし比
恥もせず我なり秋とおごりけり

仲 秋

加賀 津加 伊 豫 一 一 卜 傘 益 小 芭
北 宗 越 林 東 其 重 一 一 卜 傘 益 小 芭
枝 和 水 斧 順 角 五 泉 髮 枝 下 音 春 蕉

曠野集 卷之五

初 冬

あめつちのはなしとだゆる時雨哉
京なる人に申遣しける

一夜きて三井寺うたへ初しぐれ
はつしぐれ何おもひ出すこの夕

見しり逢ふ人のやどりの時雨哉
人を待うくる日に

今朝は猶そらばかり見る

釣がねの下降のこすしぐれかな
渡し守ばかり義着るしぐれ哉
こがらしに二日の月のふきちるか
一葉づゝ柿の葉みに或にけり
このはたく跡は淋しき圍爐裏哉

湖 尚 湍 荷 落 炊 傘 荷 同
春 白 水 兮 梧 玉 下 兮 髮

荷兮が室に旅ねする夜、草臥なほせと
て、箔つけたる土器出されければ

かはらけの手ぎは見せばや菊の花
菊のつゆ凋^{シホル}る人や鬢^{シヅメ}帽子^ガ子^シ
けふになりて菊作うとおもひけり
かなぐりて蔦さへ霜の汐木哉
淋しさは櫃の實落るね覺哉
残る葉ものこらずちれや梅も
蘆の穂やまねく哀れよりちる
あはれ

伊 濃 州 二 同 其
加 蘆 千 閣 水 角
路 通 生 夕 閣 水 角

あ さ 漬 の 大 根 あ ら ふ 月 夜 哉
 お ろ し お く 鐘 し づ か な る 霰 哉
 し ら 浪 と つ れ て た ば し る 霰 哉
 搔 よ す る 馬 糞 に ま じ る あ ら れ 哉
 柴 の 戸 を ほ ど く 間 に や む 霰 哉
 い た ぐ け る 柴 を お ろ せ ば 霰 哉
 霜 の 朝 せ ん だ ん の 實 の こ ぼ れ け り
 水 棚 の 菜 の 葉 に 見 た る 氷 か な
 深 き 池 氷 の と き に 覗 き け り
 つ き わ り て ま つ 葉 か き け り 薄 氷
 打 を り て 何 ぞ に し た き 氷 柱 哉
 兼題雪舟

津 津 俊 似
 勝 重 林 杏 宗 杜 勝 俊
 吉 治 斧 雨 之 國 似 吉 治 吉
 鼠 彈 兮 虹
 舟 風 似 吉 國 之 雨 斧 治 吉
 長 荷 鼠 夜 除 俊 勝 杜 宗 杏 林 重 勝 俊 似

原(七)本のどけしヤ
 ノの字少シ缺ケ
 (八)ハ書損ナラントア
 ツテ葱ニ作ル

枇 杷 の 花 人 の わ す る 木 陰 かな
 茶 の 花 は も の つ い で 見 た る 哉
 梨 の 花 し ぐ れ に ぬ れ て 猶 淋 し
 蓑 虫 の い つ か ら 見 る や 歸 花
 麥 ま き て 奇 麗 に 成 し 庵 哉
 の ど け し や 麥 ま く 比 の 衣 が へ
 縫 も の を た ゝ み て あ た る 火 燧 哉
 石 白 の 破 て を か し や つ ば の 花
 青 く と も と く さ は 冬 の 見 物 哉
 あ た ら し き 釣 瓶 に か へ る 葱 かな
 冬 枯 に 風 の 休 み も な き 野 哉
 蓮 池 の か た ち は 見 ゆ る 枯 葉 哉
 鷹 居 て 石 け つ ま づ く か れ 野 哉
 こ が ら し に 吹 と ら れ け り 鷹 の 巾
 鷹 狩 の 路 に ひ き た る 蕪 哉
 寒 月 に出 て 度 ぐ 月 ぞ 面 白 き
 爐 を 出 て 度 ぐ 月 ぞ 面 白 き

同 李 野 昌 全 一 落 胡 文 洞 一 松 杏 蕉
 長 水 碧 井 梧 及 鱗 枝 雪 髮 芳 雨 笠
 野 水

馬屋より雪舟引出す朝かな
雪舟引や休むも直に立てる
つけかへておくる、雪舟の

よめり哉
はや緒哉

青海や羽白黒鴨赤かしら
舟にたく火に聲たつる衝哉
朝鮮を見たもあるらん友千鳥

白炭

村龜忠 含龜一
俊洞知 咕洞井

井を掘る者は六月寒く、米つく
をとこは冬裸かなり。

汗出して谷に突こむ氷室哉
海鼠腸の壺埋めたき氷室哉
炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり
膝節をつゝめど出るさむさ哉
火とぼして幾日になりぬ冬椿
いつこけして庇起せば冬つばき
冬籠りまたよりそはん此はしら

加賀

芭龜一 壺龜利冬
蕉洞笑車洞重松

(十九) 原本、内にもノ。字全ク缺ケル。

歳暮

餅つきや内にもをらず酒くらひ
吾書てよめぬもの有り年の暮
もち花の後はず、けてちりぬべし
はる近く梅につみかける菜畑哉
煤はらひ梅にさげたる瓢かな

木曾の月みてる人のみやげに
とて、杼の實ひとつおくらる。
年の暮迄うしなはず。かざりにや
せむとて

としのくれ杼の實一つころくと
門松をうりて蛤一荷ひ
田作に鼠追ふよの寒さ哉

李尙野 一龜野
下白 水洞 髮

荷内 龜
兮習 洞

荒野集 卷之六

雑

年中行夏内十二句

供屠蘇白散

いはけなやとそなめ初る人次第

春日祭

としごとくに鳥居の藤のつぼみ哉

石清水臨時祭

杳音もしづかにかざすさくら哉

灌佛

けふの日やついでに洗ふ佛達

端午

おも瘦て葵付たる髪薄し

施米

うち明てほどこす米ぞ虫臭き

乞巧奠

(二十) 原本、乞巧費トア
ヤマル

荷 兮

(二十一)

原本、篇トアヤマ

(二十二)

原本、追難トアヤ

わか菜より七夕草ぞ覚えよき

駒 迎

爪髪も旅のすがたやこまむかへ

撰 虫

草の葉や足のをれたるきりぐす

十月更衣

玉しきの衣かへよとかへり花

五 節

舞 姫 に 幾 たび 指 を 折 に けり

追 難

おはれてや脇にはづるゝ鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計會

春風春水一時來

氷 むし 添 水 また なる 春の 風

白片落梅浮湖水

水鳥のはしに付たる梅白し

野 水

(二十三) 原本、春不留トアル。

(二十四) 原本、微ヲ歳ニアヤマリ、袂ヲ袂ニアヤマル。

(二十五) 標注ニ、古本抵ヲ底ニ作ルトアル。

春來幾伴閑遊少

花賣に留守たのまる、隣哉

花下忘歸因美景

寐入なばもの引きせよ花の下

留春春不住。春歸人

寂寞。

行春もこゝろへがほの野寺かな

微風吹袂衣

不寒復不袂

綿脱は松かぜ聞に行ころか

池晚蓮芳謝

蓮の香も行水したる氣色哉

暑月貧家何處有。客

來唯贈北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大抵四時心物苦。就中斷腸是秋天。

雪の埃それらではなし秋の空

(二十六) 又云、原本風雨ニ作ル。書損カトアル。

(二十七)

原本、鐘漏トスル。標注ニ、朗詠ニ鐘漏ニ作ルトアル。

(二十八) 原本ニ、殘影燈漏。斜光月穿牖トアル。今標注ニヨツテ改メル。

(二十九) 原本ニ、懷色トアル。之モ改メル。

(三十) 原本ニ春美トアル。之モ華ニ改メル。

夜來秋雨後。秋氣颯然新。

秋の雨はれて瓜よぶ人もなし

耿々星河欲曙天。

ひとしきりひだるうなりて夜ぞ長き

殘燈影閃牆。斜月光穿牖。

獨り寐や泣たる貌にまどの月

萬物秋霜能壞色。

白菊や素顔で見むを秋の霜

十月江南天氣好。

こがらしもしばし息つく小春哉

可憐冬景似春華。

寂寞深村夜。殘鴈雪中聞。

鉢たゝき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜礼佛名經

佛名の礼に腰懷く白髮哉

(三十一) 標注ニ、鏝字未詳トアル。

(三十一) 禪閣の撰びのこし給ひしも、
さすがにをかしくて

鋸鏝目立

舟泉

かげろふの夕日にいたきつぶり哉
付木突

五月 閨 水 鶏ではなし人の家

釣瓶繩打

かへるさや酒のみによる秋の里

糊 賣

あさ露のぎぼろ折けむつくもがみ

馬糞搔

こがらしの松の葉かきと
つれ立て

李夫人。越人

魂在何許。香煙引到焚香處。

楊貴妃

かげろふの抱つけばわがころも哉

(三十三)

原本、雲髻トスル。
下堂來ノ來ヲオト

(三十四) 又昭陽人トスル。

(三十五) 原本、默眉トスル。

(三十三) 雲髻半偏新睡覺。花
冠不整下堂來。

はる風

上陽人

小頭鞋履窄衣裳。青黛

點眉々細長。外人不見々應笑。

もの數寄やむかしの春の儘

西 施

宮中拾得娥眉斧。不獻吾

君是愛君。

花

玉貌風沙勝畫圖。

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

一日留守をする事侍りて

卯

(三十六)

原本、王照君トスル。

(三十七) 原本、藤畫圖トスル。

(三十八) 原本、柳方哉トスル。

釣 雪

釣 雪

寐やの蚊や御佛供焼火に出で行

杜若辰 生ん繪書の來る日哉

講釋の眠りにつかふ扇哉

水あびよ藍干上を踏ずとも

蟬の音に武家の夕食過に

五月申 雨や鶏とまるはね作り

是非なし 所にありて生をたつ事

鹿笛の上手を盡すあはれさよ

樹水

野鳥

鳴突の行影長き日あし哉

兒竹

杖ながら虫うりに行蜀漆かな

含咕

おもしろと鯛引けり盆の月

全

秋の昏鵜川くの火ぶり哉

含咕

一方は梅さく桃の繼木かな

越人

牛馬四足是謂天。落馬首穿牛鼻是謂人。

藏舟於穀。藏山於澤。謂之固矣。然而夜半有力者、負之而走。

絶聖棄知大盜乃止 七夕よ物かすこともなきむかし 鋭者天

(三十九) 標注ニ古本矣ノ字ヲ脱シ、有ノ字ヲ衍ストアル。

散はてゝ跡なきものは花火哉

桂夕

鈍者壽

紅アサギかな

市山

鶏頭アサギの雪になる迄

一井

藤房

けり

長虹

ほとゝぎす鳴やむ時をしりに

けり

師直

荆哉

長虹

うつくしく人にみらるゝ

長虹

一休

荆哉

長虹

いろくのかたちをかしや月の雲

湍水

法然

湍水

湍水

鳴聲のつくろひもなき

鼠彈

山岩

うづら哉

鼠彈

おくやまは霰に減るか岩の角

湍水

海岩

角

湍水

苔とりし跡には土もなかりけり

全

曠野集 卷之七

名所

八重がすみ奥迄見たる龍田哉

杜國

しらぬの骨や式部が大江山

芭蕉

から崎の松は花より朧にて

荷水

蘂一把かりて花見る阿波手哉

湍水

嵯峨までは見事あゆみぬ花盛

荷水

琵琶橋眺望

湍水

雪残る鬼嶽(四十)さむき彌生かな

宗祇

關こえて爰も藤しろみさか哉

法師

美濃國關といふ所の山寺

法師

藤の咲たるを見て

吟じ給ふとや

芳野出て布子賣をし更衣

杜國

麥うつや内外もなき志賀の

重五

(四十) 原本、鬼嶽トスル。

雲雀より上にてやすらふ峠かな
 花の陰謠に似たる旅ねかな
 櫻の咲里を眠りて通りけり
 日の入や舟に見て行桃の花
 のどけしや湊の晝の生ざかな
 ひとつ脱いで後におひぬ衣がへ

旅

大和國草尾村にて

むさしのおもへど冬の日あしぐれ
 めづらしと生海鼠を焼や小の奥
 冬のざれの獨轆轤やの、おく
 雪の富士藁屋一つにかくれけり
 よし野山も唯大雪の夕哉
 星崎のやみを見よとや鳴千鳥
 夜の日のや不破の小家の煤はらひ

津

馬

洗俊一 蓑野湍 水水笑似惡
 芭 如芭野湍 行蕉水水笑似惡
 全 一夕 芭 蕉
 楓 髮 兮 蕉

五月雨にかくれぬものや瀧田の橋
 湖の水まさりけり五月雨
 牛もなし鳥羽のあたりの五月雨
 角田川にて
 いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに
 みよしのはいかにかに秋立貝の音
 いざよひもまださらしな郡哉
 夕月や杖に水なふる角田川
 九月十三夜
 唐土に富士あらばけふの月もみよ
 鳴突の馬やり過す鳥羽田哉
 鳴突は萱津のあまのむまご哉
 武藏野やいかく所にも見る時雨
 湖をやねから見えん村しぐれ
 かから崎やとまりあはせて初

伊

豫

芭 去 芭
 貞 破 芭 越 素 胡 淵 舟 尚 隨
 實 筥 蕉 人 堂 及 支 泉 白 友
 髮 來 蕉

おくられつおくりつはては木曾の秋
 蜘蛛の巢の是も散行秋のいほ
 狩野桶に鹿をなづけよ秋の山
 とまりく稲すり歌も替けり
 入月に今しばし行とまり哉
 能きけば親舟に打碇かな
 品川にて人にわかるゝとて
 澤菴の墓をわかれの秋の暮
 草枕犬もしぐるゝか夜の聲
 旅なれぬ刀うたてや村しぐれ
 鳴海にて芭蕉子に逢うて
 いく落葉それほど袖もほころびす
 夢に見し羽織は綿の入にけり
 其角にわかるゝとき
 あゝたつたひとりたつたる冬の宿
 荷野荷常芭文一玄ち荷路芭
 兮水兮秀蕉鱗井寮ね兮通蕉

津

馬

京

(四十一)
原本、桂目を出す
トアル

ある人の餞別に
 ほとゝぎすなみだおさへて笑けり
 寐いらぬに食焼宿ぞ明やすき
 蚊をころすうち夜明る旅ね哉
 五月雨や柱芽を出す市の家
 夕立にどの大名が一しほり
 芭蕉士を送る
 稻妻にはしりつきたる別かな
 なきくて袂にすがる秋の蟬
 あき風に申かねたるわかれ哉
 物いはじたゞさへ殊のかなしさよ
 霧はれよすがたを松に見えぬ迄
 さらしなに行人々にむかひて
 更級の月は二人に見られけり
 越人旅立けるよし聞て、京より
 申つかはす
 月に行脇差つめよ馬のうへ
 野荷鼠舟野一釣傘松昌冬除
 水兮彈泉水井雪下芳碧松風

天龍でたゝかれたまへ雪の暮
から尻の馬にみてゆく千鳥哉
里人のわたり候かはしの霜

越人 傘下
宗因

越人と吉田の驛にて
寒けれど二人旅ねぞたのもしき
旅寐して見しや浮世の煤拂

芭蕉 同

述懐

艸庵を捨て出る時
きゆる時は氷もきえてはしる也
子を獨守りて田を打嬾かな

路通 快宜 落梧

余所の田の蛙入ぬも浮世かな
高野にて

杜國 梅舌

高野にて

散花にたぶさ恥けり奥の院
櫻見に行あたりたる乞食哉

芭蕉 同

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲

芭蕉 同

(四十二)
原本、辰子トス

あやめさす軒さへよそのついで哉
さうふ入湯をもらひけり一盤
一本のなすびもあまる住るかな
肩衣は^(四三)緞子^シにてゆるせ老の夏
似はしや白髪にかつぐ麻木賣
九月十日素堂の亭にて

荷兮 同 杏雨 杉風 龜洞

かくれ家やよめ菜の中に残る菊
かり家を貪るきくの垣穂かな
人のいほりをたづねて

嵐雪 颯颯

さればこそあれたきまゝの霜の宿
舊里の人に云つかはす

芭蕉 同

こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉
鎌倉建長寺にまふで

杜國 同

落ばかく身はつふねともならばやな
ある人のもとより、見よやとて

越人 同

落葉を一籠おくられて

あはれなる落葉に焼や嶋さより

荷兮 同

古郷の事思ひ出る曉に
 たらちめの暖^{クン}甫^ホや冷ん鐘の聲
 榎の火に親子足さす佗ね哉
 目や遠う耳やちかよるとしのくれ
 ふるさとや臍の緒に泣年の暮
 さまぐの過しをおもふ年のくれ
 老をまたずして鬢先におとろふ
 行年や親にしらがをかくしけり

越 除 芭 西 去 鼠
 人 風 蕉 武 來 彈

戀

春の野に心ある人の素顔哉
 きぬくや余のことよりも時鳥
 蚊屋出て寐かほまたみる別かな
 むし千の目に立枕ふたつかな
 虫干に小袖着て見る女かな
 さゝげめし妹が垣ねは荒にけり

六宮粉黛斐顔色

伊 勢 一 有 妻
 心 冬 文 長 除 風
 棘 文 瀾 虹

(四十三)
 原本、鉢鼓きトア

宵闇の稻妻消すや月の顔
 一めぐり人待かぬるをどりかな
 さびしき折に

つまなしと家主やくれし女郎花
 しりながら薄に明るつまとかな
 妻の名のあらばけし給へ神送り
 松の中時雨る旅のよめり哉
 物おもひ火燧を明ていかならむ
 うたゝねに火燧消たる別れ哉
 山畑にも思はゞや蕪ら引
 きぬぐを霞見よとて戻りけり
 おそろしやきぬぐの比鉢^(四十三)たゝき

尚 長 白 虹
 荷 兮 小 春 人 似 泉 似 人 春 兮
 越 小 荷 越 小 荷 越 小 荷
 俊 似 人 似 人 似 人 似 人
 舟 泉 似 人 似 人 似 人 似 人
 嵐 蓑 泉 似 人 似 人 似 人 似 人
 松 芳 蓑 泉 似 人 似 人 似 人 似 人
 冬 松 芳 蓑 泉 似 人 似 人 似 人 似 人
 昌 碧 松 芳 蓑 泉 似 人 似 人 似 人 似 人

無 常
 末期に
 散る花を南無阿彌陀佛と夕哉
 無常迅速

守 武

咲つ散つひまなきけしの畠哉

傘下

南無や空たゞ有明のほとゝぎす

元順

松坂の浮瓢といふ人の身まかり

たるにいひやりける

橘のかほり顔見ぬばかり也

荷兮

いもうとの追善に

手のうへにかなしく消る螢かな

去來

ある人子うしなはれける時申遣す

あだ花の小瓜とみゆるちぎりかな

荷兮

世をはやく妻の身まかりける比

水無月の桐の一葉と思ふべし

野水

辞世

あはれ也燈籠一つに主コ齋

落梧

子におくれける比

似た顔のあらば出でみん一躍り

一原野にて

(四十四)
原本食くふトス

おく露や小町がほねの見事さよ

釣雪

をみなへししでの里人それたのむ

李下が妻のみまかりしをいたみて

自悦

ねられずやかたへひえゆく北おろし

コ齋身まかりし後

去來

その人の麝さへなし秋のくれ

母におくれける子の哀れを

其角

をさな子やひとり飯(四十四)くふ秋の暮

ある人の追善に

尙白

埋火もきゆやなみだの煮る音

旅にてみまかれる人を

芭蕉

あは雪のとどかぬうちに消にけり

鳥邊野のかたや念佛の冬の月

加賀

小鼠春彈

曠野集 卷之八

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像
負て来る母おろしけりねはんぞう

西行上人五百歳忌に

はつきりと有明残る櫻かな

おなじ遠忌に

連翹や其望の日としほれけり

うで首に蜂の巢かくる二王哉

木履はく僧も有けり雨の花

つりがねを扇でたゞく花の寺

花に酒僧とも佗ん壺さかな

貞享つちのへ辰の歳、彌生一月、東照宮の別當

僧正の御房に、慈惠大師遷座、執事法華八講の

侍るよし。尊き事なれば、聽聞にまかりて、序

芭蕉 鼠 荷 胡 松 杜 冬 其 角
蕉 彈 兮 及 芳 國 松 角

(四十五)
原本扇て鼓くトス

品のこゝろを

散花の間はむかしばなし哉

女房の聽聞所と覺て、御簾たれおく暗き所あり。

龍女成佛の所に至りて、しのびあへず鼻かむ聲の

しければ

ほろくくと落るなみだやへびの玉

觀音の尾上のさくら咲にけり

古寺やつるさぬかねの菫草

八島にて

海士の家聖よびこむやよひ哉

咲にけりふへんな寺の紅牡丹

夏山や木陰くの江湖部屋

奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉

灌佛の其比清ししらかさね

高野にて

腰のあふき禮義ばかりの御山哉

芭蕉 鼠 荷 胡 松 杜 冬 其 角
蕉 彈 兮 及 芳 國 松 角
閣 井 葉 一 千 一 俊 同 越 人
似 井 閣 井 葉 一 千 一 俊 同 越 人
雪 白 蕉 葉 井 閣 井 似

(四十六) 標注ニ、古本鶴ハ鶉ノ書損カトアル

齊に來て菴一日の清水哉

十如是

おもふ事ながれて通るしみづ哉

即身即佛

夏陰の晝寐はほんの佛哉

ほころびや僧の縫をる夏衣

おどろくや門もてありく施餓鬼棚

折かけの火をとるむしのかなしさよ

石籠に施餓鬼の棚のくづれ哉

魂祭舟より酒を手向けり

たままつり道ふみあくる野菊哉

攝待のはしら見たてん松の陰

平等施一切

攝待にたゞ行人をとゞめけり

稲妻に大佛おがむ野中哉

垣越に引導覗くはせを哉

ある人、四時の景物なりとて、水鶏と

加賀

一笑

荷兮

愚益

鼠彈

荷兮

探丸

文里

龜洞

ト龜洞

ト龜洞

ト龜洞

ト龜洞

ト龜洞

ト龜洞

(四十六) 鶉とを不食。不圖其心を感じて、我も鴈をくらはず。

鴈くはぬ心佛にならぬそ

ある寺の興行に

燕も御寺の鼓かへりうて

進み出て坊主をかしや月の舟

鉢の子に木綿をらくくる法師哉

人のもとにありて、たち出むとしけるに、

またしぐれければ

衣着て又はなしけり一時雨

鎌倉の安國論寺にて

たふとさの涙や直に氷るらん

古寺の雪

曙や伽監く(四十七)の雪見まひ

同

雪折やかゝる二玉の片腕

つくり置てこはされもせし雪佛

荷兮

其角

其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

ト其一

朝寐する人のさはりや鉢鼓
千観か馬もかせかし年のくれ

文潤
其角

藥王品七句

如寒者得火

まつ白にむめの咲たつみなみ哉

如裸者得衣

雪の日や酒樽拾ふあまの家

如商人得主

双六のあひてよびこむついで哉

如子得母

竹たてゝおけば取つくさゝげかな

如渡得船

月の比隣の榎木きりにけり

如病得醫

かはくとき清水見付る山邊哉

如暗得燈

秋のよやおびゆるときに起さるゝ

神祇

古宮や雪しるかゝる獅子頭

二月廿五日奉納に

きささらぎや廿四日の月の梅

しんく^と梅散かゝる庭火哉

鶯も水あびてこよ神の梅

上下のさはらぬやうに神の梅

灯のかすかなりけり梅の中

何とやらをかめば寒し梅の花

覺えなくあたまぞさがる神の梅

月代もしみるほど也梅の露

門あかで梅の瑞籬をがみけり

繪馬見る人の後のさくら哉

花に來て齒朶かざり見る社哉

宮の後川渡り見るさくら哉

釣雪

荷兮

同洞

龜碧

昌雪

釣人

越泉

舟人

雨桐

重五

玄察

鈍可

李桃

(四十八)
標注、月額ニ作
但シ原本ニハ月代
トアル。

宮の後川渡り見るさくら哉

花に來て齒朶かざり見る社哉

繪馬見る人の後のさくら哉

門あかで梅の瑞籬をがみけり

月代もしみるほど也梅の露

何とやらをかめば寒し梅の花

燈のかすかなりけり梅の中

幾 春 も 竹 其 儘 に 見 ゆ る 哉
 君 が 代 や み が く こ と な き 玉 つ ば き
 青 苔 は 何 ほ ど も と れ 沖 の 石
 い き み た ま 疊 の 上 に 杖 つ か ん
 千 代 の 秋 に ほ ひ に し る し
 先 祝 へ 梅 を 心 の 冬 籠 り

芭 蕉
 同 龜 傘 越 重
 洞 下 人 五

しばしかくれゐたる人に申遣す

荷兮が四十の春に

(四十九) ね宜ニ作
 標注、
 但シ原本ニハ稱宜
 トアル

御 手 洗 の 木 の 葉 の 中 の 蛙 哉
 ほ と ゝ ぎ す 神 樂 の 中 を 通 り け り
 宮 守 の 灯 を ふ く る 火 串 か な
 破 扇 一 度 に な が す 御 祓 か な
 川 原 迄 瘡 ま ぎ れ て 御 祓 哉
 こ が ら し や り の 子 覗 く 神 輿 部 屋
 此 月 の 惠 比 須 は こ ち に る ま す 哉
 冬 さ れ や ね 宜 の さ げ た る 油 筒
 若 宮 奉 納
 き ゝ し ら ぬ 哥 も 妙 也 神 々 樂
 跡 の 方 と 寐 な ほ す 夜 の 神 樂 哉
 鈴 鹿 川 夜 明 の 旅 の 神 樂 哉
 か つ ら ぎ の 神 に は ふ と き 庭 火 哉
 橋 杭 や 御 祓 か ゝ る 煤 は ら ひ
 肩 付 は い く よ に な り ぬ 長 閑 也

冬 文
 卜 村 昌 野 利 落 松 尙 荷 未 龜 玄 好
 枝 俊 碧 水 重 梧 芳 白 兮 學 洞 察 葉

祝

曠野集員外

誰か華をおもはざらむ。たれか市中にありて朝
 のけしきを見む。我東四明の麓に有て、花のこ
 ころはこれを中心とす。よつて佐川田喜六のよし
 の山あさなくといへる哥歌を實にかんず。又、
 麥喰し鴈と思へどわかかれ哉
 此句尾陽の野水子の作とて、芭蕉翁の傳へしを、
 なをざりに聞しに、さいつ比田野へ居をうつし
 て、實に此句を感ず。むかしあまた有ける人の
 中に虎の物語せしに、とらに追はれたる人あり
 て、獨色を變じたるよし。誠のおほふべからざ
 る事左のごとし。猿を聞て實に下る三聲のなみ
 だといへるも、實の字老杜のこゝろなるをや。
 猶鴈の句をしたひて

麥をわすれ華におぼれぬ鴈ならし

素堂

(五十)
 標注ニ、古本鐘ハ
 書損トアル

手カシキを(五十)さしかざす峯のかげろふ
 櫓カシキの路もしどろに春の來て
 ものしづかなるおこし米うり
 門の石月待闇のやすらひに
 風の目利を初秋の雲
 武士の鷹うつ山もほど近し
 しをりについで籠の鳴る音
 袋より經とり出す草のうへ
 づぶと降られて過るむら雨
 立かへり松明直きる道の端
 千句いとかなむ北山のてら
 姥ざくらの一重櫻も咲残り
 あてこともなき夕月夜かな
 露の身は泥のやうなる物思ひ
 秋をなほなく盗人の妻

この文人の事づかりとどけられしを、三人開き
 幾度も吟じて

野荷越

水兮人兮水兮人兮水兮人兮水兮人兮水

水せきとめて池のかへとり
 花ざかり都もいまだ定らず
 捨て春ふる奉加帳なり
 墨ぞめは正月ごとにあすれつゝ
 大根きざみて干にいそがし
 遠浅や浪にしめさす蜷とり
 はるの舟間に酒のなき里
 のどけしや早き泊に荷を解て
 百足の懼る薬たきけり
 夕月の雲の白さをうち詠
 夜寒の義を裾に引きせ
 萩の聲どこともしらぬ所ぞや
 一駄過して是も古綿
 道の邊に立暮したる宜ねが
 樂すつと比とおもふ年榮
 いくつともなくためつたに藏造

荷昌野舟釣筆龜
 兮碧水泉雪 洞兮碧雪
 龜洞

兮水人兮水

明るやら西も東も鐘の聲
 さふらなりたる利根の川舟
 冬の日のてかくとしてかき曇
 豕子に行と羽織うち着て
 ふらくときふの市の塩いなだ
 狐つきとや人の見るらむ
 柏木の脚氣の比のつくぐと
 さやくことのみな聞えつる
 月の影より合にけり辻相撲
 秋になるより里の酒桶
 露しぐれ歩鵝に出る暮
 かけて
 られしとのぶ不破の萬作
 かしこまる諫に涙こぼすらし
 火箸のはねて手のあつき也
 かくすもの見せよと人の立
 かゝり

人兮水人 兮水人兮水人兮水

美柳夕霞のしき
 け草ふたき物と
 秋草のたき物と
 弓ひきとてくも
 けふも亦も
 美柳夕霞のしき
 け草ふたき物と
 秋草のたき物と
 弓ひきとてくも
 けふも亦も

舟 泉
 松 文 芳
 冬 兮
 荷 兮
 松 兮
 舟 兮
 泉 兮

盃もわするるばかり下戸の月
 やはつ秋のやみあがりなる
 つばくらはもおほかた歸る寮の窓
 水しほはゆき安房の小湊
 夏の日はや見る間に泥の照付て
 桶のやか見らる間に泥の照付て
 人のなみにつらさをしめて花にけり
 ついなみにつらさをしめて花にけり

昌 野 水
 野 釣 昌 荷 龜 舟 野 昌
 碧 兮 洞 泉 水 碧
 雪 兮 洞 泉 水 碧

(五十一)
 曲 齋 へ ぞ だ ち なる
 べ し ト 直 ス

(五十二)
 原 木 、 お 母 日 逢 た
 り ト ス ル

湯殿まゐりのもめむたつ也
 涼しやと庭もてくる川の端
 たらかされしやイる月
 秋風に女車の鬘をとこ
 袖ぞ露けき嵯峨の法輪
 時重山咲ははたちなるべし
 八重山咲ははたちなるべし
 日のいでやけふは何せん暖に
 心やすげに土もらふなり
 向まで突やるほどの小ぶねにて
 垢離かく人の着もの番
 配所にて干魚の加減覚えつゝ
 哥らたうたる聲のほそく
 むく起に物いひつけて亦睡り
 門を過行茄子よびこむ
 いりこみて足輕町の藪深し
 おもひ合たりどれも高田派

野 舟 釣 昌 荷 龜 舟 野 昌 釣 龜 荷 野 舟
 泉 兮 洞 泉 水 碧 兮 洞 泉 水 碧 兮 洞 泉 水 碧

そら面白き山口の家
 き顔の朝赤貝はきてある
 春の朝赤貝はきてある
 次第の朝赤貝はきてある
 黄昏の門さあまたか
 味噌するをとの隣さは
 けしの花とりなほす
 曉ふかしく提婆品よむ
 つくぐと錦着る身のうと
 蕤ふまへて蕎麥あふつみゆ
 さびしさは垂井の宿の冬の雨
 馬のとはほれば馬のいな
 さふくとなかれを渡る月の影

荷 冬松舟冬荷舟 松荷 冬松舟冬荷
 兮 文芳泉文兮泉 芳兮 文芳泉文兮

幾酒の半に膳もちてたつ
 高みより踏はづしてぞ落ける
 涙見せじとらち笑ひつゝ
 火鼠の皮の衣を尋き
 たまの木の葉はし
 よまで双昏の繪を先にみる
 なに事もろちしめりたる花の貌
 月のおぼろや飛鳥井の君
 燈に手をほおほひつゝ春の風
 數珠くりにかけて脇息のうへ
 隆辰も入齒に聲のしはがる
 十日の秋きくのをしき事也
 山里の秋めづらしと生鱒
 長持の秋めづらしと生鱒

舟松荷冬松舟冬荷舟 松荷 冬松舟冬
 泉芳兮文芳泉文兮泉 芳兮 文芳泉文

(五十六)
原本、けしきノ
シノ字ニマギラハ

としたくまであほり也けり
 どこでやら手の筋見せて物思ひ
 まみおもたげに泣はらすかほ
 大勢の人に法華をこなされて
 月の夕に釣瓶繩うつつ
 喰ふ柿も又くふかきも皆澁し
 秋のけしき^{五十六}の畑みる客
 わがまにいつか此世を背くべき
 寐ながら書か文字のゆがむ戸
 花の賀にこらへかねたる涙落つ
 着も^{五十六}の糊のこはき春かぜ
 うち群て浦の筥屋の汐干見よ
 内へは^{五十六}いりてなほゆる犬
 酔ざめの水の飲たき比なれや
 たゞしづかなる雨の降し
 歌あはせ^{五十六}独鉦鎌首まるひけり
 また^{五十六}献立のみなちがひけり

下 同 人 同 下 同 人 同 下 同 人 同 下 同 人 同 下

忍ぶともしらぬ顔にて一二年
 庇をつつけて住居かはりぬ
 三方の数むづかしと火にくぶる
 供奉の艸鞋を谷へはきこみ
 段く^{五十六}や小壘大原嵯峨の花
 人おひに行はるの川岸

筆 全 水 全 兮 全

月さしのぼる氣色は、晝の暑さもなくなるおもしろさに、
 柄をさしたらばよき團扇と、宗鑑法師の句をすむじ出すに
 夏の夜の疵といふ。なほ其眺もやまずつゞきぬ。
 月に柄をさしたらばよき團扇哉
 蚊のをるばかり夏の夜の疵
 とつくりを誰が置かへてころぶらん
 おもひがけなきかぜふきのそら
 眞木柱つかへおさへてよりかゝり
 使の者に返事またする
 あれこれと猫の子を選るさまぐに

謹 同 人 同 傘 越

下 人

(六十)
原本○
アヤマリト
アルガ

(五十九)
原本○
アル。標注ニヨレト
ト。原本ノ書損カレ

田にしをくうて腥きくち
 翁に伴なはれて来る人の
 めづらしきに
 落着に荷兮の文や天津雁
 三夜さの月見雲なかりけり
 菊萩の庭に疊を引づりて
 飲でわする茶は水になる
 誰か来て裾にかけたる夏衣
 齒ぎしりにさへあかつきのかね
 恨たる泪まぶたにとまわりて
 静御前に舞をすむる
 空蟬の離魂の煩のおそろしき
 あとなかりける金二万兩
 いとをしき子を他人とも名付けたり
 やけどなほして見しつらきかな
 酒(六十) 熨き耳につきたるさゝめごと

其 越 角

全 角 全 人 全 全 人 人 全 角 全 人

蕉

破れ戸の釘うち付る春の末
 みせはさびしき麥のひきわり
 家なくて服紗につゝむ十寸鏡
 ものおもひるる神子のものいひ
 人去ていまだ御座の匂ひける
 初瀬に籠る堂の片隅
 ほととぎす鼠のある最中に
 垣穂のさゝげ露はこぼれて
 あやにくに煩ふ妹が夕ながめ
 ああ雲はたがなみだつゝむぞ
 行月のうはの空にて消さうに
 砧も遠く鞍にいねふり
 秋の田をからせぬ公事の長びきて
 さいくながら文字間にくる
 いかめしく瓦庇の木薬屋
 馳走する子の瘦てかひなき
 花の比談義參もうらやまし

人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 全

念者法師は秋のあきかぜ
 夕まぐれまたうらめしき昏子夜着
 弓すゝびたる突あげのまど
 道ばたに乞食の鎮守垣
 ものきゝわかぬ馬士の鬪とり
 花の香にあさつき膾みどり也
 むしろ敷べき喚續の春

我もらじ新酒は人の醒やすき
 秋うそ寒しいつも湯嫌
 月の宿書を引ちらす中に
 外面薬の草わけにねて
 はねあひて牧にまじらぬ
 里の馬

嵐雪

全人 全人 全人 全角 全人 全雪

魚をもつらぬ月の江の舟
 そめいろの富士は浅黄に秋のくれ
 花とさしたる草の一瓶
 饅頭をうれしき袖に包みける
 うき世につげて死ぬ人は損
 西王母東方朔も目には見ず
 よしや鸚鵡の舌のみじかき
 あぢきなや戸にはさまるゝ衣の棲
 戀の親とも逢ふ夜たのまん
 やゝおもひ寐もしねられず
 うち臥て
 米つく音は師走なりけり
 夕鴉宿の長さに腹のたつ
 いくつの笠を荷ふ強力
 穴いちに塵うちはらひ草枕
 ひゝなにかざりて伊勢の八朔
 満月に不斷櫻を詠めばや

全人 全角 全人 全角 全人 全角 全人 全角 全人 全角

日川のみじかきと冬の朝起
 山川や鶺鴒の喰ものをさがすらん
 賤を遠から見るべかりけり
 おもふさま押合月に草臥つ
 あらことぐし長櫃の萩
 川越の歩にさゝれ行穩の雨
 ねぶと痛がる顔のきたなさ
 わがせこをわりなくかくす緑の下
 すがよき習ふ比のうきこひ
 更る夜の湯はむづかしと水飲て
 こそぐり起す相住の僧
 峯の松あぢなあたりを見出たり
 旅するうち心の綺麗さ
 烹た玉子なまのたまごも一文に
 下戸は皆いく月のおぼろげ
 耳や齒やようても花の敷ならず
 具足めさせにけふの初午

落 野 落

梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 水 梧 全 水 全 梧

川越くれれば城下のみち
 疱瘡貌の透とほるほど齒の
 唱哥はしらず聲ほそりやる
 なみだみるはなれぐのうき雲に
 後ぞひよべといふがはりなき
 今朝よりも油あげする玉だすき
 行燈はりてかへる浪人
 着物を礎にうてと一つ脱
 明日は髪そる宵の月影
 しら露の群て泣るる女客
 つれなの醫者の後姿や
 ちる花に日はくるれども長咄
 よぶこ鳥とは何をいふらん
 初雪やことしのびたる桐の木に

野

水

人 越 雪 人 越 雪 嵐 人 越 全 雪 人 人

雄蟹トシアルトスルナ
トシアルトスルナ
鮎注ニ
和名抄ニ
鮎皆同ジ

葛籠とよきて切ほどく文
問はれても涙に物云
宮司が妻にほれ二三日
里深く踊教に三
たわらに(六十一)鮎をつかみこむ秋
夕月の入(六十一)は早き塘ぎは
肩ぎぬはれ酒によふ人
さきくさや正木を引に誘ふらん朝
かけひの先の瓶氷る朝
一里の炭賣はいつ冬籠り

朝誰よりの花を先へ見て垣に
軒ながく月こそさはれ五十間道
寂しき秋を女居りけり
占を上手にめさるうやまし
黍もてはやすいにしへの酒
ねふりころべと雲雀鳴也

鼠一胡長一鼠長胡鼠
彈井及虹井彈虹及彈

一井

梧水全梧

挑灯過て跡闇きく米車
何事を泣けむ髪を振おほひ
しかく物もいはぬつれなき
はづかしといやがる馬にかき
かゝる府中を餽ねふり行
雨やみて雲のちぎるゝ面白や
柳ちるかと例の蕤
軒ながく月こそさはれ五十間道
寂しき秋を女居りけり
占を上手にめさるうやまし
黍もてはやすいにしへの酒

全水梧全 水梧水 梧水梧水 梧水全

(六十三)
原本日足トスル

(六十二)
原本引ノ字ヘン缺
ケル

見ぬは板片毒衣御こ暮
 わくねへ風なり引有きた過
 たす<のぎたたりか様入たる障
 す<ぬてち瓜ぶ道のや子の障
 ほと日(六十三)踏所て一る人のほの陰のうそ寒
 どは脚(六十三)たる黒き庭の内雨喰ぬ也音にはき
 はみのしれぬ花曇也

胡長鼠一胡長一鼠長胡
 及虹彈井及虹井彈虹及

京寺町通二條上ル町井筒屋
 筒井庄兵衛板

らとくと寐起ながらに湯を
 寒ゆく夜半の越の雪鋤
 なに事かよばりあひてはらち笑ひ
 蛤とりはみな女中也
 浦風に脛吹まくる月涼し
 みるもかしこき紀伊の御魂屋
 若者のさし矢射てをる花の陰
 蒜くらふ香に遠ざかりけり
 はるのくれありきくも睡るらん
 昏子の綿の裾に落つゝ
 はなしする内もさいく手を洗
 座敷ほどある蚊屋を釣けり
 木ばさみにあかるうなりし松の枝
 秤にかかゝる人<の興
 此年になりて炙の跡もなき
 まくらもせぜについ寐入月

鼠一胡長一鼠長胡鼠一胡長一鼠長胡
 彈井及虹井彈虹及彈井及虹井彈虹及

飛

と

こ

膳
所

江南の珍碩我にひさこを送レリ。これは是水漿をもり、酒をたしなむ器にもあらず、
或は大樽に造りて、江湖をわたれといへる、ふくべにも異なり。吾また後の惠子に
して、用ることをしらず。つらくそのほとりに睡りあやまりて此うちに陥る。醒
てみるに、日月陽秋きらゝかにして、雪のあけぼの、闇の郭公もかけたることなく、
なほ吾知人とも見えきたりて、皆風雅の藻思をいへり。しらず、是はいづれのとこ
ろにして、乾坤の外なることを。出てそのことを云て、毎日此内にをどり入。

元祿三六月

越智

越人

花見

(一)
標注ニ、
靴ハ俗字カトア
ヒキハケ

木ののどかに汗も鱈も櫻かな
西日のどかによき天氣なり
旅人の風かき行春暮ヒキハケ(一)て
はきも習はぬ太刀のヒキハケ(一)靴
月待て假の内裏の司召
靱白つくる柚がはやわざ
鞍置る三歳駒に秋の來て
名はさまぐに降替る雨
入込に誼訪の涌湯の夕ま暮
中にふ事もせいの高き山伏
いふ事を唯一方へ落しけり
ほそき筋より戀つゆりつゝ
物おもふ身にも喰へとせつかれて
月見る顔の袖おもき露
秋風の船をこはがる波の音

翁

水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁 水碩翁

原本欠廻トスル。

親紫駕蝠ういろ
子蘇籠蝠たろ
な蘇籠ののれく
ら實のとどか蝶の名も
ら實をかますらぬ峠越たり
び入る夕暮
て入る夕暮
月に物くふ

全頌全路翁
通

玆頌

一貫の錢むづかしと返しけり
醫者のくすりかは飲ぬ別
花咲けば芳野あたりを驅廻
虻にさゝるゝ春の山中

翁十二
玆頌十二
曲水十二

頌水翁水

唯花月憎我中假双酒手熊羅文何巡千鴈
四薄夜れ名《の持六では東野に書より礼部ゆく
方あまりくいては里に土間に佛の目をげ弓み日ほも死讀く
なるまねけらぬ躍のな居れは蚤もなし
草ばら枯る月煎の肝を煎也
庵ら枯る月煎の肝を煎也
の枯る月煎の肝を煎也
露て月煎の肝を煎也

頌翁水頌翁水頌翁水頌翁水頌翁水頌翁水頌翁

蕎 麥 眞 白 に 山 の 洞 中
 う どん う つ り の は づ れ の 月 の 影
 す も ぐ も つ 子 の み な 裸 む し
 め づ ら し や ま ゆ 烹 也 と 立 ど ま り
 文 珠 の 智 恵 も 槃 特 が 愚 癡
 な れ 加 減 又 と は 出 來 じ ひ し ほ 味 噌
 何 と も せ ぬ に 落 る 釣 棚
 し の ぶ 夜 の を か し う な り て 笑 出 ス
 逢 ふ よ り 顔 を 見 ぬ 別 し て
 汗 の 香 を か へ て 衣 を と り 残 し
 し き り に 雨 は う ち あ げ て ふ る
 花 ざ か り 又 百 人 の 膳 立 に
 春 は 旅 と も お も は ざ る 旅

翁 一
 路通 八
 荷兮 十

人兮人兮人兮人兮人兮人兮全

(三)
 曲 齋 八 臈 よ ト ス ル

秋 の 色 宮 も の ぞ か せ 給 ひ け り
 こ そ ぐ ら れ て は わ ら ぶ 佛
 う つ り 香 の 羽 織 を 首 に ひ き ま き て
 小 六 う た ひ し 市 の か へ る さ
 鯉 釣 の ち い さ く 見 ゆ る 川 の 端
 念 佛 申 て を が む み づ が き
 こ し ら へ し 薬 も ら れ ず 年 の 暮
 庄 野 の 里 の 犬 に お ど さ れ
 旅 姿 稚 き 人 の 姫 つ れ て
 花 は あ か い よ 月 は 臈 夜
 し ほ の さ す 縁 の 下 迄 和 日 な り
 生 鯛 あ が る 浦 の 春 哉
 此 村 の 廣 き に 醫 者 の な か り け り
 そ ろ ば ン お け ば も の し り と い ふ
 か は ら ざ る 世 を 退 屈 も せ ず に 過
 ま た 泣 出 す 酒 の さ め ぎ は
 な が め や る 秋 の 夕 ぞ た び ひ る き

通 全 碩 全 通 全 碩 全 通 全 碩 全 通 兮

兮

(六) 原本、見廻トスル。
(七) 原本、位トスル。

(五) 標注云、一本ニ驛ハ書損ト。

一里こそぞり山の下の川
見知られて岩屋に足も留られず
それ世は泪雨としくれと
雪舟に乗越の遊女の寒さうに
壹歩につなぐ丁百の錢
月花に庄屋をよつて高ぶらせ
養しめの壇のからき早蕨
くる春に付ても都わすられず
半氣違の坊主泣出(五)ナキ
のみに行く居酒の荒の(五)ナキ
古きばくちののこる鎌倉
時くは百姓までも烏帽子にて
配所を(六)見舞ふ供御の蛤
たそかれは船幽靈の泣やらん
連も力はも皆座頭なり
かから風の大きに用叶へたき
蟲のこはるに用叶へたき

乙野里 乙野里 乙野里 乙野里 乙野里
泥 泥 泥 泥 泥
怒 怒 怒 怒 怒
誰 誰 誰 誰 誰
州 州 州 州 州
徑 徑 徑 徑 徑
東 東 東 東 東
頤 頤 頤 頤 頤
土 土 土 土 土

(四) 標注云、原本おけ
はれて見エレド
モおそはれノ書損
カ。異本ニ又ハレ
鬼はニヤトアル。壓

鐵砲の遠音に曇る卯月哉
砂の小麦の瘦てはらく
雨風にますほの小貝捨はせて
なまぬる一つ餉ひかねたり
碁いさかひ二人しらける有明に
秋の夜番の物(四)もうの聲
女郎花心細氣におけはれて
目の中おもく見遣がちなる
けふも又川原咄しをよく覚え
顔のをかしき生つき也
馬に召神主殿をうらやみて

城下

越人八

野徑

乙野里 乙野里 乙野里 乙野里 乙野里
泥 泥 泥 泥 泥
怒 怒 怒 怒 怒
誰 誰 誰 誰 誰
州 州 州 州 州
徑 徑 徑 徑 徑
東 東 東 東 東
頤 頤 頤 頤 頤
土 土 土 土 土

(十一) 原本鳥啼トスル。

寐 御 心 初 雪 鶯 風 秋 蟻 獨 小 百 唯 龜
 簾 の 花 の の 呂 萩 蟻 寐 哥 姓 の 甲
 と の そ に や の の の 落 て そ の 牛 煮
 に 香 こ 雛 う 寒 き 加 減 の 御 前 き 綿 仕 風 時
 起 吹 そ こ 戀 樽 居 なる か ま す こ の 塵 出 し
 聞 ば 籟 鳴 出 し け り 衆 燈 月 繩 て 音 ず
 昌 探 里 玆 乙 二 野 及 正 昌 探 里 玆
 房 志 東 碩 州 嘯 徑 肩 秀 房 志 東 碩

雜

乙 州

(八) 原本糊トスル。
 (九) 原本夕邊トスル。
 (十) 原本菜食トスル。
 飯ヲ食ト書ク例、
 其ノ頃ノ書ニ多
 イ。

田 杉 醉 髮 四 看 夕 糊
 の 村 を く 十 經 の の 剛
 片 の 細 せ は の 月 き
 隅 花 め に 老 嗽 に 夜
 に は 若 あ の 枕 の ま 菜
 苗 の 葉 け を 跡 つ り 飯
 と 雨 に て 寐 直 し 咳 出
 り 氣 吹 る し き 咳 氣 出
 さ づ する 際 聲 す
 し き して 際 聲 す

野徑 六
 里東 六
 泥土 六
 乙州 六
 怒誰 六
 玆碩 五
 筆 一

泥 怒 野 乙 玆 里 怒 泥
 土 誰 徑 州 碩 東 誰 土

(十二) 原本、馬ノアハルハ
傳馬ノアハルハ
カ。標注ニ、轉マ
作ル書損カトモア
ル。

(十三) 原本、標注共ニ狭
箱トスレド、挾箱
カ。書キアヤマリ
カ。

(十四) 原本紙手トアルハ
四手ノアヤマリカ

綿入の巾着下て月に行
また上京も見ゆるや、さむ
蓋に盛鳥羽の町屋の今年米
雀を荷ふ籠のぢ、めき
うす曇る日はどんみりと霜を
鉢いひならふ聲の出かぬ
染て憂木綿裕のねずみ色
撰あまさされて寒きあけぼの
暗がり薬罐の下をもし付
轉馬を呼る我まはり口
いきりたる籠一筋に狭箱
水汲かゆる鯉棚の秋
ざわくと切籠の紙手に風吹
奉加の序にもほのかなる月
喰物に味のつくこそ嬉しけれ
煤掃うちは次居替る
目をぬらす禿のうそにとりあけて

正 秀 房 及 野 乙 二 野 及 正 昌 探 里 珍 乙 二 野 及 正
秀 房 志 東 頤 州 嘯 徑 肩 秀 房 志 東 頤 州 嘯 徑 肩 秀

(十五) 原本上、茨トスル。
標注ニハウハブル。
ト假名ヲ付ケル。

こひにはかたき最上侍
手みじかに手拭ねぢて腰にさげ
繩を集る寺の^(十五)上
花の比畫の日待に節ご着て
さ、らに狂ふ獅子の春風

乙州 四
珍頤 全
里東 四
探志 全
昌房 全
正秀 全
及肩 全
野徑 全
二嘯 全

昌 秀 房 及 野 乙 二 野 及 正
房 秀 房 志 東 頤 州 嘯 徑 肩 秀 房

(十七) 標注ニ、原本吃ハ
書損トアル。叱ら
れてト直ス。

(十六) 原不ニ入逢トア
ル。

獨 あり 子も 矮鶏に 替ける
 江 戸 酒を 花 咲 度 戀 へしが 相り
 あ い 啼 里 は 既 糞 かの 入 相
 雲 雀 吹 居 禪 門 の 祖 父 し
 火 を 吹 居 禪 門 の 祖 父 し
 本 堂 は ま だ 荒 壁 の は し ら 組
 羅 綾 の 袂 し ぼ り 給 ひ ぬ
 齒 を 痛 人 の 姿 を 繪 に 書 け
 簿 雪 た 痛 人 の 姿 を 繪 に 書 け
 藤 垣 の 窓 に 紙 燭 を 挟 お け
 口 上 果 ぬ い 紙 燭 を 挟 お け
 た ふ と げ に 小 判 か ぞ ぬ 時 宜
 秋 入 初 る 肥 後 の 限 本
 幾 日 路 も 苦 で 月 見 役 者 船
 寸 布 子 ひ と 苦 で 月 見 役 者 船
 澤 山 に 兀 だ め っ 夜 と 叱 也 け 船
 呼 あ り け ど も 猫 は 歸 ら ず

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 全 秀 碩

嘯 道 や 苗 代 時 の 角 大 師
 明 れ ば 霞 む 野 鼠 の 顔
 明 れ ば 霞 む 野 鼠 の 顔
 か ま へ を か し き 門 口 の 文 字
 か ま へ を か し き 門 口 の 文 字
 月 影 に 利 休 の 家 を 鼻 に 懸
 月 影 に 利 休 の 家 を 鼻 に 懸
 度 は 皆 つ ぐ れ ぐ れ と 鳴 や ら む
 度 は 皆 つ ぐ れ ぐ れ と 鳴 や ら む
 虫 は 皆 つ ぐ れ ぐ れ と 鳴 や ら む
 虫 は 皆 つ ぐ れ ぐ れ と 鳴 や ら む
 片 足 を 百 も た て た る 別 路 に
 片 足 を 百 も た て た る 別 路 に
 誓 文 を 百 も た て た る 別 路 に
 誓 文 を 百 も た て た る 別 路 に
 な み だ ぐ み け り 供 の 侍
 な み だ ぐ み け り 供 の 侍
 須 磨 は ま だ 物 不 自 由 なる 豪 所
 須 磨 は ま だ 物 不 自 由 なる 豪 所
 狐 の 恐 る 弓 か り 空 の 銀 や 河
 狐 の 恐 る 弓 か り 空 の 銀 や 河
 月 氷 師 走 の 空 の 銀 や 河
 月 氷 師 走 の 空 の 銀 や 河
 無 理 に 居 大 脇 指 も 打 くれ ず
 無 理 に 居 大 脇 指 も 打 くれ ず

正 秀

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 全 秀 全 珍 碩

猿

蓑

乾

子規御小人町の雨あがり
やしほの楓木の芽萌立
散花に雪踏挽づる音ありて
北野の馬場にもゆるかげろふ

正秀十九
弥碩十七

寺町二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

秀碩 秀碩

(二) 標注云、元禄ノ製
 本行アリ、月筆者ノ
 一其角ト書ス、首
 然各ミ、一帖ノ書紙
 ノ去シ、後ノ書肆
 序ノ去シ、後ノ書肆
 ト云ハ非蕉翁ノ也
 ノ云ハ非蕉翁ノ也
 序ノ去シ、後ノ書肆
 行末ニ西馬ト書キ
 入レテ筆者ハ

晋 其 角 序

俳諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起べき時なれや。幻術の第一とし
 て、その句に魂の入ざれば、ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとどまり、
 長く人にうつりて、不變の變をしらしむ。五徳はいふに及ばず。心をこらすべきた
 しなみなり。彼西行上人の骨にて人を作りたて、聲はわれたる笛を吹やらになん
 侍ると申されける。人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂の法のおろ
 そかに侍にや。さればたましひの入たらむにこそとて、我翁行脚のころ、伊賀越し
 ける山中にて、猿に小叢を着せて、俳諧の神を入たまひければ、たちまち斷腸のお
 もひを叫びけむ。あだに懼るべき幻術なり。これを元として此集をつくりたて、猿
 みのとは名付申されける。是が序もその心を取り、魂を合せて、去來凡兆のほしげ
 なるにまかせて書。

(元禄未歲五月下浣 雲竹書)

猿 蓑 集 卷 之 一

冬

初しぐれ猿も小叢をほしげ也
 あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲
 時雨きや並びかねたる魴ぶね
 幾人かしぐれかけぬく勢田の橋
 鑓持の猶振たつるしぐれ哉
 廣澤やひとりと時雨るゝ沼太郎
 舟人にぬかれて乗し時雨かな
 伊賀の境に入て
 なつかしや奈良の隣の一時雨
 時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり
 馬かりて竹田の里や行しぐれ
 だまされし星の光や小夜時雨
 新田に稗殼煙るしぐれ哉
 いそがしや沖の時雨の眞帆片帆
 芭蕉 其角 千那 丈艸 正秀 史邦 尙白
 曾良 凡兆 乙羽 大津 膳所 膳所 膳所
 去來 房紅 房紅 房紅 房紅 房紅 房紅 房紅

(三) 原本鹿トスル。

(三) 又靈聖女トアル。又靈聖ノ聖ハ書損ナリトアル。

(四) 原本雜水トスル。

はつ霜に行や北斗の星の前
一いろも動く物なき霜夜かな

淀にて

はつしもに何とおよるぞ船の中

歸花それにもしかん庭切

禪寺の姿の落葉や神無月

百舌鳥のゐる野中の杭よ十月

こがらしや頬腫痛む人の顔

砂よけや蟹のかたへの冬木立

ならにて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな

澁柿をながめて通る十夜哉

ちやのはなやほるゝ人なき靈照女

みのむしの茶の花ゆゑに折れける

古寺の簀子も青し冬がまへ

翁の堅田に閑居を聞て

雑炊のなごころならば冬ごもり

膳所

野百水歳

其角

同兆

凡嵐

凡芭蕉

凡兆

凡芭蕉

凡兆

凡芭蕉

凡兆

凡芭蕉

凡兆

凡芭蕉

凡兆

伊賀

車來

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

珍頌

尙白

(五) 原本不王トスル。

膳まはり外に物なし赤柏

水無月の水を種にや水仙花

今は世をたのむけしきや冬の蜂

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉

一夜くさむき姿や釣干菜

みちばたに多賀の鳥居の寒さ哉

茶湯とてつめたき日に稽古哉

炭竈に手負の猪の倒れけり

住つかぬ旅のこゝろや置火燧

寝ころや火燧蒲團のさめぬ内

門前の小家もあそぶ冬至哉

木菟やおもひ切たる晝の面

伊賀 羽坂田

尾張

伊賀

伊賀

江戶

江戶

尾張

尾張

尾張

尾張

尾張

(五)

品玉 來丸 翁白 蕉兆 角兆 境

(六) 標注ニ、原本柴の
戸トアリ。去來抄
ニ先師曰柴戸ナリ
出板ニ及トモ改ム
ベシトアル

みづづくは眠る處をさゝれけり
まじはり紙子の切を譲りけり
浦風や巴をくづすむら衛
あらか磯やはしり馴たる友衛
狼のあと踏消すや濱千鳥
背門口の入江にのぼる千鳥かな
いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥
矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥
筏士の見かへる跡や鴛の中
水底を見て來た顔の小鴨哉
鳥共も寝入てゐるか余吾の海
死まで操なるらん鷹のかほ
襟(六)卷に首引入て冬の月
この木戸や鎖のさゝれて冬の月
からしりの蒲團ばかりや冬の旅
見やるさへ旅人さむし石部山

伊賀

半 杖 曾 去 史 丈 千 凡 木 丈 路 且 杉 其 暮 智
残 艸 良 來 邦 艸 那 兆 節 艸 通 藥 風 角 年 月
長崎 大津尼

(七) 原本櫻欄トスル。

(八) 原本盡好トスル。

翁行脚のふるき衾をあたへ
らる。記あり。略之。
首出してはつ雪見ばや此衾
疊めは我が手のあとぞ紙衾
魚のかげ鶴のやるせなき氷哉
しづかさやを數珠もおもはず綱代守
御白砂に候す
膝つきにかしこまり居る霞かな
棕欄(七)の葉の霞に狂ふあらし哉
鵲の橋よりこぼす霞かな
呼かへす鮒賣見えぬあられ哉
みぞれ降る音や朝飯の出来る迄
はつ雪や内に居さうな人は誰
初雪に鷹部屋のぞく朝朗
霜やけの手を吹てやる雪まるげ
わきも子が爪紅粉のこす雪まるげ

美濃

竹 曾 探 丈 史 野 示 凡 畫 其 史 羽 探
戸 良 丸 艸 邦 童 蜂 兆 好 角 邦 紅 丸
伊賀 膳所

猿蓑集 卷之二

夏

有明の面おこすやほととぎす
 夏がすみ曇り行衛や時鳥
 野を横に馬引むけよほととぎす
 時鳥けふにかぎりて誰もなし
 ほととぎす何もなき野の門構
 ひる迄はさのみいそがす時鳥
 蜀魂なくや木の間の角櫓
 入相のひゞきの中やほととぎす
 ほととぎす瀧よりかみのわたりかな
 心なき代官殿やほととぎす
 こひ死ば我塚でなけほととぎす
 松島一見の時、千鳥もかるや
 鶴の毛衣とよめりければ
 松島や鶴に身をかれほととぎす

遊女
 共木芭尙凡智史羽丈去奥
 角節蕉白兆月邦紅艸來
 良

(十一) 原本米囊花トス

うき我をさびしがらせよかんこ鳥
 旅館庭せまく、
 庭草を見ず
 若楓茶いろに成も一さかり
 四月八日、詣慈母墓
 花水にうつしかへたる茂り哉
 葉がくれぬ花を牡丹の姿哉
 別僧
 ちるときの心やすさよ米囊花
 智恵の有る人には見せじけしの花
 翁に供られてすまあかしに
 わたりて
 似合しきけしの一重や須磨の里
 青くさき匂もゆかしけしの花
 井のすゑに浅く清し杜若
 起出て物にまぎれぬ
 朝の間の

膳所
 芭蕉
 水
 其角
 全
 越人
 珎碩
 杜國
 嵐蘭
 半残
 亡人

起くの心うごかすかきつばた

仙化

豆植る畑も木べやも名處哉

曾凡良兆

南都旅店

破垣やわざと鹿子のかよひ道

尾張千那

豊國にて

誰のぞくならの都の闌の桐

去凡兆

洗濯やきぬにもみ込柿の花

正芭蕉來兆

竹の子の力を誰にたとふべき

越芭蕉人

たけの子や畠隣に悪太郎

秀蕉

たけのこや稚き時の繪のすさび

正芭蕉

明石夜泊

越芭蕉

猪に吹かへさるゝともしかな

越芭蕉

蛸壺やはかなき夢を夏の月

越芭蕉

君が代や筑摩祭も鍋一ツ

越芭蕉

五月三日、わたましせる家にて

(十二) 原本隈篠トスル。

やね茸と並でふける菖蒲哉
粽結ふかた手にはさむ額髪
隈笹の廣葉うるはし餅粽
さびしさに客人やとふまつり哉

江戸芭蕉
尚岩翁白

五月六日大坂うち死の遠忌を吊ひて

大坂や見ぬよの夏の五十年

伊賀蟬吟

奥高館にて

夏草や兵共がゆめの跡
這出よかひ屋が下の蟾の聲

芭蕉

此境はひわたるほどといへるも

こゝの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石
五月雨に家ふり捨てなめくじり
ひね麥の味なき空や五月雨
馬士の謂次第なりさつき雨

同凡兆
史木邦節

奥高名取の郡に入て、中將實方

(十三) 原本ゆめノゆ少シカケル。

(十四)
原本金情ニトス

の塚はいつくにやと尋侍れば、
道より一里半ばかり左の方笠
嶋といふ處に有とをしゆ。ふり
つゞきたる五月雨いとわりなく
打過るに

笠嶋やいづこ五月のぬかり道

芭蕉

大和紀伊のさかひはてなし坂に
て、往來の順禮をとめて奉加
すゝめければ、料足つゝみたる
紙のはしに書つけ侍る。

つゝくりもはてなし坂や五月雨

去來

髪剃や一夜に(十四)金精サて五月雨

芭蕉

日の道や葵傾くさ五月あめ

羽芭蕉

七十余の老醫みまかりけるに、
弟子共こそりてなくまゝ、予に
いたみの句乞ける。その老醫い

紅蕉

まさかりし時も、さらに見しれ
る人にあらざりければ、哀にも
おもひよらずして、古來まれな
る年にこそといへど、とかくゆ
るさよりければ

六尺も力おとしや五月あめ

其角

百姓も麥に取つく茶摘哥

去來

しがらきや茶山しに行夫婦づれ

秀來

つかみ合子共のたけや麥島

力秀

孫を愛して

力秀

麥藁の家してやらん雨蛙

智月

出來て鯉迄喰ふ山家哉

紅月

風流のはじめや奥の田植うた

芭蕉

眉掃を面影にして紅粉の花

芭蕉

立さまや蚊屋もはづさぬ旅の宿
 参宮する従者にはなむけして
 うとくなる人につれて、
 隙明や蚤の出て行耳の穴
 下闇や地虫ながらの蟬の聲
 客ぶりや居處かゆる蟬の聲
 頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲
 哀さや盲麻刈る露のたま
 渡り懸て藻の花のぞく流哉
 舟引の妻の唱歌か合歡の花
 白雨や鐘きゝはづす日の夕
 素堂之蓮池邊
 白雨や蓮一枚の捨あたま
 日焼田や時くつらく鳴か蛙
 日の暑さ盥の底の蟻かな

膳所 里 東
 其 丈 嵐 探 芭 蕉 志 雪 艸 角
 伊 賀 史 千 凡 槐 芭 蕉 志 雪 艸 角
 嵐 乙 凡 史 千 凡 槐 芭 蕉 志 雪 艸 角
 凡 乙 嵐 史 千 凡 槐 芭 蕉 志 雪 艸 角
 兆 芴 蘭 邦 那 兆 市 蕉 志 雪 艸 角

南無佛の太子を拜す
 御袴のはづれなつかし紅粉の花
 田の畝の豆つたひ行螢かな
 膳所曲水之樓にて
 螢火や吹とばされて鳩のやみ
 勢田の螢見二句
 闇の夜や子共泣出す螢ぶね
 ほたる見や船頭酔ておぼつかな
 三態野へ詣ける時
 螢火やこゝおそろしき八鬼尾谷
 あながちに鶉とせりあはぬかもめ哉
 草むらや百合ハ中々はなの貌
 病後
 空つりやかしらふらつく百合の花
 すゞ風や我より先に百合の花
 焼蚊辭を作りて
 子やなかん其子の母も蚊の喰
 膳所 里 東
 伊 賀 万 千 乎 那
 去 來
 芭 蕉 兆
 長 崎 田 上 尼
 尙 白
 半 殘
 大 阪 何 處
 乙 洲
 嵐 蘭

(十五) 原本野童ノ童少シ
缺ケル
(十六) 古本去來かもとへ
ノか缺ケル。

(十七) 原本宗次ノ次少シ
缺ケル
(十八) 標注ニ、原本朝ナ
リ一本淺ニ作ル
ハ誤トアル。
(十九) 原本月鉦ノ月、似
た物ノ似少シ缺ケ
ル。

水無月も鼻つきあはす數寄屋哉
日の岡やこがれて暑き牛の舌
たゞ暑し籬によれば髪(十五)の落
じねんこの藪(十六)ふく風ぞあつかりし
夕がほによばれてつらき暑さ哉
青草は湯入ながめんあつさかな
千子が身まかりけるをきよて、みのゝ
國(十六)より去來かもとへ申つかはし侍ける。
無き人の小袖も今や土用干
水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ
じだらくにねれば涼しき夕べかな
すゞしさを朝草門(十八)に荷ひ込
唇(十九)に墨つく兒のすゞみかな
月(十九)鉦や兒の額の簿(十九)粧(十九)
夕ぐれや帆(十九)並びたる雲のみね
はじめて洛に入て
雲のみね今のは比叡に似た物か

江
戸
巴羽野(十五)木正同
山紅童節秀

大
阪
之
去會千凡宗(十七)嵐芭
道來良那兆次蘭蕉

猿蓑集 卷之三

焮

穉風や蓮をちからに花一つ

不
讀
人知

此句東武よりきこゆ。
もし素堂か。

かつくりとぬけ初る齒や秋の風
芭蕉葉は何になれとや焮の風
人に似て猿も手を組秋のかぜ

加賀の全昌寺に宿す

杉
路
珎
碩
風
通
碩

終夜秋風(二十)きくや裏の山
蘆原や鷺の寝ぬ夜を焮の風
あさ露や鬱(二十)金(二十)晶(二十)の秋の風
はつ露や猪の臥芝の起あがり
大比叡(二十)やはこぶ野菜の露しげし
三葉ちりてあ(二十)とはかれ木や桐の苗

江
戸
會
山
川
良
去
兆
來
童
野
童
兆
童
凡
童
兆
童

(二十) 原本跡はトスル。

原本微雨トスル。
標注、霏又微雨カ
トアル。

文月や六日も常の夜には似ず
合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ
七夕やあまりいそがばころぶべし
みやこにも住まじりけり相撲取
朝がほは鶴眠る間のさかりかな
薺やぬかごの蔓のほどかれず
笑にも泣にもにざる木槿かな
手を懸てをらで過行木槿哉
高燈籠ひるは物うき柱かな
はてもなく瀬のなる音や三十一微雨リ
そよくや藪の内より初あらし
秋風やとても薄はうごくはづ
迷ひ子の親のこゝろやすき原
八瀬をはらに遊吟して、柴うり
の文書ける序に
まねきく柄の先の薄かな
つくしよりかへりけるに、ひみ

伊賀少年
膳所
伊賀
去
芭
同
杜
若
來
麥
肩
蘭
風
那
邦
尹
紅
兆

(二十二)
重注ニ、
アリ。イカニ
心ヲ認ベシ
トアル。

君がてもまじるなるべしはな薄
草刈よそれが思三十三ひか萩の露
元祿二年翁に供せられて、みち
のくより三越路にかゝり行脚し
けるに、かゞの國にていたはり
侍りて、いせまで先立けるとて
といふ山にて卯七に別て

いづくにかたふれ臥とも萩の原
桐の木にうづら鳴なる塀の内
百舌鳥なくや入日さし込女松原
初鴈に行燈とるなまくらもと
堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉
海士の屋は小海老にまじるいと哉
加賀の小奈と云處、多田の神社
の寶物として、實盛が菊から草
のかぶと、同じく錦のきれ有。

芭
同
芭
蕉

曾
芭
蕉
良

平
田
去
李
由
來

遠き事ながらまのあたり憐にお
ぼえて

むざんやな甲の下のきりぐす
菜畠や二葉の中の虫の聲
はたおりや壁に来て鳴夜は月よ

いせにまうでける時

葉月や矢橋に渡る人とめん
三ヶ月に養ヲのあたまをかくしけり
粟稗と目出度なりぬはつ月よ
月見せん伏見の城の捨郭

翁を茅舎に宿して

をもしろう松笠もえよ薄月夜

加茂に詣、しでに涙のかゝる哉と、
かの上人の

たなこのやしろの神垣に

取つきてよみしとや

月影や拍手もるゝ膝の上

友達の六條にかみそりいたゞく

芭 尚 風 子 道 残 來 芳 邦

亡人

千 之 半 去 來

伊賀

土 芳

史 邦

とてまかりけるに

影ぼうしたぶさ見送る朝月夜
はせを葉や打かへし行月の影
京筑紫去年の月とふ僧仲間
吹風の相手や空に月一つ
ふりかねてこよひになりぬ月の雨
向の能き宿も月見る契かな

伊賀

卓 乙 丈 凡 尚 曾 良 袋 芴 艸 兆 白 良

元祿二年つるがの湊に月を見て、

氣比の明神に詣、遊行上人の古

例をきく

月清し遊行のもてる砂の上

仲殊の望、猶子を送葬して、

かゝる夜の月も見にけり野邊送
明月や處は寺の茶の木はら
月見れば人の碁にいそがはし
僧正のいもとの小屋のきぬたかな
初潮や鳴門の浪の飛脚舟

膳所

去 昌 羽 尚 凡 兆 白 來 蕉

花すゝき大名衆をまつり哉
 行秋の四五日弱るすゝき哉
 立出る秋の夕や風ほろし
 世の中は鶴の尾のひまもなし
 鹽魚の齒にはさかふや殊の暮

嵐丈凡同荷
 雪艸兆兮

柿ぬしや梢はちかきあらし山
 しら浪やゆらつく橋の下紅葉
 肌さむし竹切山のうす紅葉

賀勢小松

去塵凡
 來生兆

さればこそひなの拍子のあなる哉
 神田祭の鼓うつ音
 拍子さへあづま
 蚊足

なりとや

(二十三)
 原本あやまりてノ
 あ缺ケ、めノヤウ
 ニナル。

一戸や衣もやぶるゝこまむかへ
 稗の穂の馬逃したる氣色哉
 澁糟やからすも喰はす荒畠
 あやまりてぎらうおさゆる鱸哉
 一鳥不鳴山更幽
 物の音ひとりたふるゝ案山子哉
 むつかしき拍子も見えず里神樂
 旅枕鹿のつき合軒の下
 鳩ふくや澁柿原の蕎麥畠
 上行と下くする雲や穉の天
 鱒釣比も有らし鱸つり
 るなか間のうすべり寒し菊の宿
 菊を切る跡まばらにもなかりけり
 高土手に鶉の鳴日や雲ちぎれ
 この比のおもはるゝ哉稷の秋
 稷かつぐ母に出迎ふうなる哉

自題落柿舎

江

去越正嵐
 來人秀蘭
 凡會千
 兆良里
 凡珍千
 兆碩里
 半凡珍
 兆碩里
 尙角
 白殘兆
 碩角
 兆芳碩
 凡土珍
 兆芳碩

猿蓑集 卷之四

春 梅 咲て 人の 怒の 悔もあり

上臈の山莊にましくけるに
候し奉りて

梅が香や山路獵入ル犬のまね
むめが香や分入里は牛の角

庭興

梅が香や砂利しき流す谷の奥
はつ蝶や骨なき身にも梅の花

膳所 半土

梅が香や酒のかよひのあたらしき
むめの木や此一筋を露のたう

膳所 蟬角

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もと床し梅の花
瘦藪や作りたふれの軒の梅
灰捨て白梅うるむ垣ねかな

芭蕉 几那 兆

日 當りの 梅 咲ころや宵牛房

膳所

支 幽

入 相の 梅 になり 込ひゞきかな

風 麥

残夢

寝 ぐるしき窓の細目や闇の梅

乙 忍

辛未のとし彌生のはじめつかた、

よしの山に日くれて、梅のに
ほひしきりなりければ、舊友嵐
窓が、見ぬかたの花や匂ひを案
内者といふ句を、日ごろはふる
き事のやうにおもひ侍れども、
折にふれて感動身にしみわたり、
涙もおとすばかりなれば、その
夜の夢に正しくまみえて、悦る
けしき有。亡人いまだ風雅を忘
ざるや。

(二十四)
原本よこた川ノ川
ノ字全ク欠ケル

鶯や下駄の齒につく小田の土
鶯や窓に灸をすゑながら
やぶの雪柳ばかりはすがた哉
此瘤はさるの持べき柳か
垣(二十四)ごしにとらへてはなす柳哉
よこた川植處なき柳かな
青柳のしだれや鯉の住所
雪汗の蛤いれやす場のすみ
待中田家に有ての正月もはやくだりす月
うき友にかまれてねこの空ながめ
うらやましやつるゝ戀か猫の妻
うらやましやつるゝ戀か猫の妻
春風にぬぎもさだめぬ羽織哉
野のむめのちりしほ寒き二月哉
出かはりや櫃にあまされるござのたけ

伊賀魚丸 伊賀魚丸 伊賀魚丸
江戸探丸 江戸探丸 江戸探丸
同伊賀 同伊賀 同伊賀
楊木一尚遠 楊木一尚遠 楊木一尚遠
芭蕉人蕉 芭蕉人蕉 芭蕉人蕉
去越芭 去越芭 去越芭
龜尚龜 龜尚龜 龜尚龜
翁白翁 翁白翁 翁白翁

夢さつて又一匂ひ宵の梅
百八のかねて迷ひや闇のむめ
ひとり寝も能宿とらん初子日
野畠や鴈追のけて摘若菜
はつ市や雪に漕來る若菜船
宵の月西になづなのきこゆ也
裾折て菜をつみしらん草枕
つみすてゝ蹈付がたき若な哉
七種や跡にうかるゝ朝がらす
我事とヒナヤウ鯨のにげし根芹哉
うすらひやわづかに咲る芹の花
隴とは姿のくろさに月夜かな
鉢たゝきこぬよとなれば隴なり
鶯の雪蹈落す垣穂かな
鶯やはや一聲のしたりがほ
うぐひすや遠路ながら禮かへし

憶翁之客中

嵐雪通角 嵐雪通角 嵐雪通角
路通角 路通角 路通角
其丈其路嵐 其丈其路嵐 其丈其路嵐
同去同 同去同 同去同
江戸賀 江戸賀 江戸賀
其溪一 其溪一 其溪一
角石桐來 角石桐來 角石桐來

